
Muv-Luv -3rd story- 世界への介入者

Oka Nieba

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M u v - L u v - 3 r d s t o r y - 世界への介入者

【Nコード】

N 4 2 6 8 W

【作者名】

O k a N i e b a

【あらすじ】

天地無用！に転生したオリ主がある事件をきっかけにM u v - L u vの世界に飛ばされます。

なぜM u v - L u vの世界ではナチス・ドイツが強かったのか。どのようにして世界は構築されたのか。

オルタネイティヴ計画とは何のための計画なのか。

独自解釈モノですので、お気をつけください。

また、武は出ますが、あまり対応がよくありません。

マブラブ主要キャラ等が消される可能性があります。

恋愛要素は…低めになりそうです…。

世界背景：天地無用！、舞台：マブラヴ、設定：アウターガンダム、フルメタル・パニック、Dies irae、パトレイバー、Hellsing

第0話：三命の頂神達の画策（前書き）

こんにちは。

初投稿になります。

よろしく願います。

第0話：三命の頂神達の画策

ここは三命の頂神が張った結界内。

誰にも干渉される事はないこの中で、一人の男の処遇について話し合っていた。

——姉者、 ■ ■には我が管理する世界に行ってもらうが構わぬな？

——その次元はどうなっているんだい？

——なに、”所詮”は研究目的に創った世界。 ■ ■が潰しても一向に構わぬぞ。

——はあゝ。あたしは”そんなこと”聞いてるんじゃないんだよ。
また”Z”みたいのが出てこられても困るって事を言ってるんだ！！

今回は ■ ■を成長させるのが目的なんだよ！
そもそも今回の件だってあんたが変なちょっかいを出さなきゃこんな事には…

——わ、わかった姉者！わかったから注射器を下げてくれ！！

■ ■が死ぬような所ではない！地球人のいる世界だから大丈夫だ！

本気を出さなくても大丈夫…

というよりも姉者だって遊んでいたくせに、なぜ我だけが悪いのだ！

――訪希深、あんたのはやり過ぎなんだよ！
やり方ってものが…

――んんっ！…お戯れはそこまでにしませんか？

瀬戸殿も ■ ■ ちゃんも我々を待っているのですから。
訪希深の世界も”さほど悪く”ありませんでしたよ。

――…津名魅が言うんなら大丈夫だね。

じゃあそこに行ってもらおうかい。あたしは ■ ■ に説明するか
ら瀬戸殿は頼むよ。

――解りました、鷺羽姉さん。

あと、お願いが一つ…

――ん？珍しいね？どうしたんだい？

――訪希深の世界が終わったらその…

私の世界に ■ ■ ちゃんを入りたいのです…

――まあ、裁量はあたし達に任せられてるからいいんじゃないのか
い？

でも何でさ？

――そ、それはその時にお話しさせていただきますので！

■ ■ ちゃんによろしく伝えといてください！
それではお先に！

――ああ…

不思議に思いつつも驚羽もその場を後にする。むくれている訪希深を置いて…

第0話・三命の頂神達の画策（後書き）

■ ■ …

読みづらい。

第1話：澱みの中で笑う鬼と蟹（前書き）

天地無用！GXPはアニメ版の知識しかありません。
また真備清音さんだけは登場しますのであしからず。
このへんは独自解釈です。
それではどうぞ。

第1話：澱みの中で笑う鬼と蟹

第二世代艦「水鏡」のメインブリッジ。ここは今、暗い空気しか立ちこめていない。

所以は、第三聖衛艦隊司令補佐官の無期限休職命令である。

樹雷の裏の最高権力者であり、水鏡のマスターである神木瀬戸樹雷の判断は間違っていない。

実際、休職命令というのは人材流出を防ぐ一種の手段である。

ただ”無期限”という言葉が彼女の部下達の心に引っかかっているのだ。

「瀬戸様…どうにかならないのでしょうか？」

この男、平田兼光は神木家第七聖衛艦隊司令官にして「瀬戸の剣」と呼ばれる豪傑である。

それほど逸材が、今回の判断は非の打ち所がないという事実を受け止めながらも、この空気に耐えきれず皆を代表して言った。

「だからねえ、これは決定事項なの。」

わかっているでしょ？いくら何でも今回は隠しきれない事じゃない。私だって命令したくないわこんな事。それに、津名魅様の御言葉も頂いてるわ。

まあ……確かに気持ちはわかるわよ。

結果はどうあれ水穂、林檎達を助けたのですもの……」

あつ！そこは地雷！

聞き耳を立てていた部下達は恐る恐る二人を見る。

柁木水穂、神木家第三艦隊司令官兼情報部副官にして「瀬戸の盾」

と呼ばれる聡明な女性である。
そんな”彼女の”補佐官が自分のせいで今まさに裁かれようとしている。

否、裁かれた。

そう、これは決定事項。決して覆る事のないもの。
休職命令だけなら良かった。いつでも会えるから。

だが、彼女そして補佐官に近い者だけが知っている彼の本当の処遇。
三命の頂神によって異世界に彼が送られる、つまりは島流しなのだ。
しかも”無期限”の。

心中穏やかでは無いのは当たり前だ。

それは林檎も同じであつた。

立木林檎、瀬戸配下の経理部主任にして「経理の鬼姫」と呼ばれる
理知的な女性である。

二人とも俯いたまま何も言わない。

下唇を咥え、言葉を出すのを必死にこらえている。
耐えるように体は小刻みに震えている。

「はあゝ。ヤダヤダ。

この重い空気をどうにか出来ないかしら？

仕事が進まないじゃない。

三日よ三日。何時まで引きずってるのよ。」

瀬戸はあきれたように扇子を広げたまま上に上げ、彼女たちを挑発
する。

それでも動かない。何も言い返さない。ビクつく部下達。
悪循環である。

流石の瀬戸もしびれを切らし扇子を力強く閉じた。
それと同時にとてもないプレッシャーが当てられる。

「水穂ッ！林檎ッ！ふざけるんじゃないわよ！
あんた達がそんなのでどうするの！！」

「「うつ…」」

樹雷の鬼姫ここにあり。この闘気を流せる者などここにはいない。

「大体あんた達そんなことで彼が喜ぶの！？」

まるで彼が死んだみたいじゃないか…と思いつつも言う。
だが彼女らは未だに俯いている。

「「すみません…」」

それしか言い返せなかった。
そしてそのままブリッジを後にする。

「待ちなさい！話はまだっ…」

…っはあ。どうすりやいってのよ。私は。
私だって引きこもりたいわよ。でも…と思った所で秘匿通信が入る。
彼女もブリッジを去り自室で回線を開く。白眉鷺羽だ。

「大変そうね、そっちも」

「と言うことはそちらでも？鷺羽”殿”」

「まあ…ね。」

と、苦々しく返答する鷺羽。

榎木家も同じ空気。二人とも大きいため息を吐く。

「あの子は無事に飛ばせたよ。」

不意に本来の用件を伝える。すると瀬戸は遠い目をしてつぶやくように話す。

「そうですね…早く帰って来てくれる事を願いますわ。私の為にも。」

「大丈夫。きつと立派に成長してきてくれる。私たちが育てたんだからさ。」

「では私たち…という激励ですか？」

ふふっ…と手を口に当て上品に瀬戸は笑う。そう、それしか無いのだ。

「水穂殿と林檎殿は津名魅に任せたから、大丈夫。」

「あら、それは助かりますわ。此方も打つ手なしで困っていたのですよ。」

時に、真備清音殿は？」

「それも津名魅。あの子が打つ手は良さそうよ。」

ふっふっふっ…打って変わってマッドな笑いをする鷺羽。

それもこれも彼が一つ目の世界を終わらせてからだけど、と一言付け加えた。

瀬戸にとっては不安材料でしかないがこれも計画の為、仕方がないと相づちを打って答えた。

二人とも心なしが顔色が良い。

「それでは瀬戸殿。」

「それじゃあね、鷺羽”ちゃん”。」

二人は英気？を養い通信を切ったのであった。

第1話：澱みの中で笑う鬼と蟹（後書き）

うん。

本編行かないなあ…

と言うより瀬戸様のキャラが難しい。

オリ主の細かい設定は存在しているのですが…
これは小出しか、もしくは別の機会に。

第2話：ズレた感情（前書き）

まだまだ影の薄いオリ主…

第2話：ズレた感情

榎木家の一畳程度の広さの物置だったその部屋は今、ある女性の研究室と繋がっている。

この部屋は…いや、一つのスペースコロニー…

否、星々の集まりが、彼女の研究所と化している。

2012年12月25日現在、地球上でこんな技術を有しているのはただ一人。

何を隠そう、彼女は宇宙一の天才科学者、白眉鷺羽とはこの方であるッ…

てってれ〜

ムフツ、ムフフフフ…と自画自賛しているのもまた彼女ただ一人である。

そしてそれが事実なのも確かである。

彼女は今、そんな広大な研究所のとある一角へ向かっている。

そこは白眉鷺羽が認めた、最初で最後の弟子に預けた研究室である。

彼は本当に不思議な子だった。

この天才がいくら調べても、摩訶不思議の言葉しか出てこないのだ。

長神の力を持つてしてもなにも解らない。

もはや解析不能、というのは少し語弊がある。

わかっていることは”長神の力を受け付けない”という事。

つまり彼が存在している次元は巻き戻すことが出来ないのだ。

そして、彼が存在している次元はここしかない。

よって導き出せる答えは…

つと、そんな物思いに耽っている間に部屋の前に着く。

「んんっ…」

これから彼を別の次元へ飛ばすのだ。

あの事を引きずってなければいいのだけど…
と思いつつノックを四回打つ。

案の定返事がない。

やれやれ…と首を振りつつ、しっつれいするよ〜と言いながらドアを開ける。

そこにいたのは、地球で言う眉間に指を当てた「考える人」だった。

「ひどい顔してるじゃないの、あんだ。」

怪訝な顔で鷺羽は一人の男の顔を覗く。

すると、完全に瞳孔の開いた深紅の眼差しで見つめてくる。

「私の…罰は決まりましたか…鷺羽様…」

ああ…台無しじゃないかその顔は。

鷹のような鋭い眼光。女性のように整ったその容姿。

「いつものように『マッド』とは呼んでくれないのね。

まあいいわ。

あんたは、まず始めに訪希深の管理する世界に行ってもらう。」

「それだけでしょうか…。」

「んにゃ、それプラス訪希深と”契約”をしてもらおうよ。」

一瞬彼の肩が跳ねたような感じがした。
そして何処からかポンツと音を立てて、可愛らしい訪希深が現れた。
それに何も反応せず彼は尋ねる。

「して、その契約とは？」

「八つある。

1 約束の日を地球上における敵対地球外生命体を駆逐した日と定める。

2 この日まで戦い続けなければならない。

3 この日まで力を解放してはならない。

4 この日まで決して逃げたり死んではならない。

5 人類に一人だけ自らの主を定め、この者を守護する事。

6 約束の日が訪れたとき第5の契約は破棄される。

7 これが行われた時、火星を奪還する事。

8 これが行われた時、訪希深との契約は解消される。

以上だ。

わ、我としては■ ■を送りたくないのだがなっ…

姉者がどうしてもと言うから仕方なく…」

と、頬を赤らめ自分の人差し指を付けたり離したりしている。

「あゝ あゝ ああ！

もう！あんたはしばらく黙ってなさい！！」

本当にやつかいな子だ。

”Z”の一件以来、訪希深は妙に余所余所しくなっていけない。

「はあ、それで飲んでくれるかいな？」

「飲むも何も。」

無感情にただ従うだけ。

彼には今何を言っても変わらない。

それなら事を進めて帰ってくるのを待つのが正解だ。

「ん、じゃあ飛んでもらうよ。

訪希深、頼んだよ！」

「それでは■■行くぞー!!」

ずるずるとピクニックに行くように彼を連れて行く訪希深。

はてさて■■はどんな風に帰ってくるだろうか。

瀬戸殿にも報告しなきゃね。

マッドな笑いをしつつ一つの書類を手にとる。

そこには■■のハイパー改造計画Ver.4と書かれていた。

第2話：ズレた感情（後書き）

オリ主スペック

黒髪、長髪、後ろ縛り。

目は深紅、鷹のようなツリ目。

Helisingアーカード青年Verか、ウォルター少年という感じで。

このままでは恐ろしいので、細めの眼鏡を掛けてインテリっぽくなくつてます。

普通に見れば美青年です。

眼鏡を掛けると目が黒く見える不思議…

体は鷺羽特製ナノマシンで廻り以上の回復力。

つまり…不老長寿？

鷺羽が出来る事は基本彼も出来ます。

スタイルは…暗躍系

つまりウォルターみたいな糸でバツンバツン裂いて、Gガンシユバルツのゲルマン忍法使って、柎木遙照樹雷みたいな武術家…。

三人を割って強化した感じです。

ちなみに2012年12月22日時点で皇家の樹のバックアップ無しで光鷹翼六枚発現させてます。

不吉な日ですね…。

まあ、その辺の能力はこの話で制限された事になってます。

また、今の訪希深はすっかりさんなので予定とちよつとずれた事をします。

そして、連れて行くという表現ですが実際はアストラル投射しています。

次でブローグ終わらせる予定です。

第3話・もう一つの契約（前書き）

この後の展開を考えていくと難しいです。
これでプロローグは終わります。

第3話：もう一つの契約

「この場所…」

その場所は、得体の知れない植物が辺り一面に茂っている。

少し歩みを進めると、どこか懐かしい雰囲気漂う巨木が佇んでいた。

高さにして約100メートル、幅約6メートル。

彼はこの樹を知っている。でも知らない。

そんな樹。

幹の前で止まる。そして樹に触れる。

流れ込んでくる流れ込んでくる流れ込んでくる流れ込んでくる

ナニカが流れ込んでくる。

目眩がする。

頭が割れそうだ。

落ちる。

落下する。

「ああ…アンタの言うとおりになったよ。」

誰に話しかけているのだろうか？

彼は闇の中を落ち続けているだけなのに。

「アンタの契約…たった一つの契約…あんな簡単な契約がこんな結果になるなんて…」

本当に地獄になった。」

彼の目には零れんばかりの涙があふれている。

「なあ、まだ終わらないのか？まだ終わらせてくれないのか？」

返事は帰ってこない。

「まだなのか…」

ナニカに納得し目をつむる。

それと同時に彼は気を失った。

第3話：もう一つの契約（後書き）

はいっ！

意味不明ですね！

許してください…

あと、タイトルが3rd storyになっていますが、武の三回目のループという意味ではありませんのであしからず。
本編行きます。

第1話：五撰家に生まれし鬼（前書き）

パトレイバーキャラが入ります。

また、これはフィクションです。

登場するキャラクターは実在する人物とは関係ありません。

歴史も都合の良いように改変されていますので、注意してください。

9 / 19 第1話：五撰家に生まれし鬼 で一貴の年齢に誤りがあったので訂正。

誤：私の名前は天木一貴。アマキ カズキ 歳は3歳。

←

正：私の名前は天木一貴。アマキ カズキ 歳は2歳。

第1話：五摂家に産まれし鬼

目が覚めたら誰かと話していた。

話の内容は覚えていない。

でも、とても悔しくて…そんな感情だけはぼんやりと覚えている。
そして最後にこう言うのだ。

「…に会って真に…める。…方が…しろい。」
よく見る夢の一つだ。

曙計画の合同先行調査報告書が来ているので会社のオフィスで読んでいる。

1000枚にも及ぶ報告書を要約すればこうなる。

『F-4の基本性能は対BETAには有効であると判断出来る。しかし、我が国の資源保有量は依然低く、十分な弾薬の補給は困難であり、米国の戦術は日本のそれには適合しかねる。故に日本独自の機動性、近接戦闘に特化した戦術機の開発が急務である。』

…なんというかやる気を無くす内容だった。

そんな当たり前の報告をする暇があるなら米国の戦術機の情報をもっと多くして盗んで来て欲しい。

なんのために研究費用を投資したのかわからない。

私の名前は天木^{アマキ}一貴^{カズキ}。歳は2歳。

天木という苗字はあまり好きではない。

なんかこう、前世では相性が悪かったのではないかと言った類だ。
それに本名ではない。

元々、私は崇宰家で生まれた人間だ。
自分で言うのもなんだが、我が国では五撰家の一角でそれはもう格
式高い名家だ。
ではなぜそんな家から出て天木を名乗るのか。
そんな疑問は簡単に解決される。
私の眼を見たまえ。

深紅に染まっている。

これが一番の問題なのだ。
そして困ったことに私は洋風の顔立ちをしていて、犬歯が普通の人
間より尖っており、かつ生まれながらにして日本語がきちんと話せ、
書けた。

実の母親と私はすぐさま遺伝子検査。

結果は白。純日本人だった。

五撰家でもある崇宰家に「鬼」が産まれたとなつてはこの戦時下問
題らしい。

そうゆう訳で崇宰家の元家臣であつた天木家にお世話になることと
なつた。

私が言える事ではないが、この天木家、私を養子として引き受けた
”変態”である。

現天木家当主、アマキ ジュウザブロー天木重三郎、この人がその元凶。

彼は元帝国斯衛軍少将。現在は天木重工業、天木商会の代表取締役
兼社長。

現役時代、国内国外問わず「斯衛軍一のキレ者にしてクセ者」と言
われていた。

事の発端は習志野俘虜収容所での捕虜の扱いである。

当時の軍関係者などの反対を押し切り、故西郷寅太郎大佐を強力に支援しドイツ人捕虜を手厚く保護した。

噂では、この行為にヴィルヘルム2世はいたく感動し、亡命中であったのにも係わらず非公式ながらプール・ル・メリット勲章を贈ったとされている。（後の平和章の原案とされる事になる）

これが元でフリードリヒ・ハックラを中心としたグループと深い親交を持ち、天木重工業、天木商会の前身ドイツ科学研究所を設立。この研究所を通し日本の近代化に大きく後押しした。

余談ではあるが、ドイツ国内では日本「重三郎」という図式が一般に認知されており慕われている。

さらに、彼のこういった功績は皇帝陛下、皇武院家等のごく僅かな有力者には高く評価されている。

第二次世界大戦ではドイツとの交渉窓口は彼であり、航空機や小火器などの兵器は彼の長男を筆頭として日本に還元していた。

しかし米国の原爆に巻き込まれ長男は死亡。

こういった理由からドイツ軍人・研究者らの亡命を強力に手引きしたとされている。

敗戦後は、病弱だった彼の三男がその商才でもって会社を大きくした。

彼は独国とのパイプを生かし小火器、弾薬を中心に開発、販売。

世界シェア10%を越えるという快挙を成し遂げ、日本国内では40%は優に越える日本兵器産業の草分け的存在となった。

また長男の死亡、次男はミッドウェー海戦で死亡していたため、彼、アマキ ユウジ天木祐司が天木家当主となり、慣例として斯衛軍に技術将校として入隊した。

ただ、1968年には肺結核を患い死亡している。

又3人は妻を貰っていたものの子に恵まれず跡取りは誰一人いなかった。

故に重三郎が当主に戻り、会社の経営をしているのである。
彼は77歳という高齢であるため、子を得る為にはいささか無理がある。

さらに言うなら彼の妻もすでにこの世には居らず、彼自身も新たな嫁を貰うつもりが無い。

なぜなら、彼は多くの武家に嫌われているからである。

武家というのは商いをしてはならないという仕来りが存在しており、またドイツとの親密さからナチスのシンパ、若しくはドイツのスパイという噂が絶えず崇宰家からも敬遠されている。

彼は退役しているとはいえ「赤」を司る斯衛である。

自分の苦勞を子にける必要は無いし、会社も別の人物に任せればいいという考えにいた。

ここで、私の存在である。

産まれながらにして鬼とされ、存在を消されようとしていたときに彼は私を引き取った。

今でも覚えている。

彼は私にこういった。

「修羅の道を歩む心意気はあるかの？」

まったくこの”じじい”0歳の餓鬼にとんでもないこと聞いて来やがった。

私は、私の運命を切り開くことを決断し「是」と答えた。

そして、武術に始まり経営学やらなんやら様々な知識を与えられたお陰で今や、じじいのバックに付き事実上会社の運営は私がやっている。

そして一つの計画を練っているのだが…

「入るぞ、坊主。」

「ノックしてから入室してくださいよ…」

物思いに耽っていた私は突然の来訪に驚きもせず眼鏡を外しながら振り返る。

この男は榊 清太郎、帝国陸軍技術軍曹。
天木重工業の技術部出身。

亡き祐司さんの親友であり一般人で唯一、彼にタメ口で話していた男だ。

戦術機が発表された後「こいつあ男のロマンだ」と訳のわからないことを口走り、天木重工業の部長のポストを蹴って帝国陸軍技術廠へ行った猛者でもある。

今回、軍から我が社に出向してもらい曙計画に行ってもらった。

「ん。」

500枚程度のまとめられた書類をぶつきらばうに渡す。

それを私が受け取ると、自分専用のマグカップに珈琲を入れてソファに座り込む。

表紙には”極秘” ”部外秘” ”転記禁止”などと真つ赤に染まっている。

題は「戦術機の管制ユニット及びシステムのリバーエンジニアリング報告」とある。

数枚めくるだけでもこの報告書の濃さが伝わってくる。

ため息をしつつ書類を閉じ机に置く。

これは直ぐに読めるような内容ではない。

「流石ですね、おじさん。」

「あのな、坊主。」

俺は仕事でそれを行っているんだ。

それにお前さんに流石だなんて言われる筋合いは無い。
俺にとっちゃ当然の内容だ。」

だから他の連中が出来てないから……と言おうと思ったが私は3歳。
こんな餓鬼に褒められるのは屈辱だよな。

「わかりました。お仕事ご苦労様でした。」

「それでいいんだよ。」

俺は技術部に戻ってそいつの内容説明してくるわ。」

彼はそのまま膝を強く叩き立ち上がる。

んじゃあな、とドアノブに手をかけつつ背を向けながら片手をあげて退室する。

そして、私は眼鏡をかけ直し書類に手を出すのであった。

第1話：五摂家に生まれし鬼（後書き）

天木一貴

天地無用！の世界での名前とは関係ありません。

あと、彼は記憶を失ってます。

パトレイバーのおやっさん！

いいですね〜

それでは

第2話：Phantom（前書き）

アウターガンダムの設定が入ります。
松浦まさふみさんの描く女性キャラが個人的にツボです。

9 / 19 第1話：五撰家に生まれし鬼 で一貴の年齢に誤りがあったので訂正。

誤：私の名前は天木一貴。アマキ カズキ 歳は3歳。

← 正：私の名前は天木一貴。アマキ カズキ 歳は2歳。

第2話：Phantom

このBETAとの戦争、人類の敗北はもはや免れない状況となっている。

パレオロゴス作戦によるミンスクハイブ攻略失敗。
それによるスルグートハイブの建設。

BETAの攻撃はもはや留まるところを知らない。

いや、もしかするとこれは戦争では無いのかもしれない。

そもそも戦争とは国家の間で行われる血を血で洗う争いだ。

我々人類は、彼奴等から未だに宣戦布告を受けていない。

ということは、彼らは我々を敵と見なしていないのではないだろうか？

とある研究者がBETAの生態をアリに例えて話をしているが、疑問点がある。

彼らは”防御”しないのだ。

あらゆる場面において”侵攻”するか”攻撃を受ける”この2点だけである。

ということは守るべきものがないのではないだろうか？

アリならば女王アリや卵を守る…まあ例え話に噛み付くのもあれだが…。

つまり、母なる存在がそこには無く、一つの機械として作業しているのではないか。

そして同じ炭素系生物である人類もまた機械として認識されていると仮定する。

ともすると、彼らは一体なんの作業をしているのだろうか？

彼らは一つ一つの星を隅々まで”占領”する。
まるで掃除をするように。
いや、隅々まで何かを探しているのか…。

それを確かめる術はまだ無い。

あれから3年、榊からもたらされた情報は、天木重工業の手によってその体を成そうとしている。

「完全自立型無人機システム実証試験機（案）」

またの名を「Zephyr Phantom System」という。

純粹に、BETAを殺すためだけのものだ。

これは一貴と内海が戦術機を無人で大量投入するために考案し、実験しているシステムである。

内海とは天木重工業、戦術機課課長。

といっても神出鬼没な人間で実際の所、黒崎という部下が実質的に課を動かしているようで、課長らしいことは何もしていない。

一貴は「給料分は働いている」ということで今のところは放置しているようだ。

一貴は生まれながらにして持っている知能でもって、天木グループの利益を上げ続けている。

例えば認知心理学を使用した深層心理療法を生み出し、応用として戦術機パイロットの精神安定・高揚に寄与している。

一種の催眠・洗脳であるが、これによりBETAの殺傷率が上がっており、パイロットの生存率も上がっているのも事実だ。

他にも日本の軍事組織向けに衛士強化装備の開発・生産。

さらには管制ユニットのライセンス生産も行っている。

その延長上にあるのがこのゼファーである。

この戦争は人が行う必要はないという考えの元、出来たシステムである。

「一貴や。この者が強力してくれるそうじゃ。」

重三郎が一人のブロンドヘアーの老人を連れて来た。

「初めまして、カズキ様。」

そう言つて右手を差し出し、自己紹介を始める。

何とも、怪しい雰囲気の漂う彼の名はヴァレリアン・トリファという。

彼は重三郎が助けたナチストの一人らしく、恩返しの一つとして来日したらしい。

一貴は、様はよしてくれ、彼に言つたが受け付けてくれない。

そのまま一貴は握手を受け、手早く自己紹介をした後問いかける。

「トリファ殿、今回の件は難しい事ですがそれでも？」

しかもじじい……もとい、重三郎の恩と言つても私には関係ありません。」

「ええ、構いません。」

我々の教義には友を愛せよ、とありますから。

貴方も例外ではありません。

大方、重三郎様からお話を伺っていますが、要は秘密裏にゼファーとやらの実戦試験を行いたい、という事ですね？

それと、殿は結構ですよ。」

なぜゼファアを公開試験しないのか。
ゼファアシステムは人間が乗らない戦術機の為、G制限がかからない。

シュミレーション、つまりは架空空間での戦闘で改造型F-4に乗ったゼファアはとんでもない戦果をたたき出している。

対BETA戦シュミレーションで地上支援無し、補給状態30%、BETA出現率100%でヴォールクデータをやらせたところ、ハイク内を”単機で深度約100m”侵攻した。

このデータは開発陣を驚かせ、一貴主催で盛大な宴を施設内で行った。

誰もが人類の勝利を確信した瞬間だった。

その中で内海が酔った勢いでゼファアをMig-21と戦わせた。
F-4に乗ったゼファアと日本の仮想敵国機Mig-21とのキルレシオ。

その数値0：955

これは、まだ見ぬ第3世代戦術機以上の戦闘能力である。

会場は騒然。

「戦争をさせてみましょう」という内海の提案で、試しに集団戦を行わせてみたところ、敵と味方の区別が出来ておらず動くモノ全てを破壊してしまった。

BETAより酷い、この結果を見た会場は一気に通夜と化してしまった。

その後、改良してみたところ、一様はIFFを認識しているようだが”高脅威目標”を殲滅するために味方を犠牲にする箇所が見受けられ危険過ぎるのである。

また、それに伴い単機でのハイブ侵入も困難になってしまった。とは言っても、無人で戦闘参加できる事のメリットは高く、少しでもBETAの侵攻を押さえる為にはいち早くバトルプルーフしなければならぬ。

ちなみに、一貴の侵入深度はゼファーと同条件で約20m。そもそも、単機で侵入できる彼も彼で規格外だが…

閑話休題、一貴はトリファの言う教義、という言葉に少々疑問を持ちつつも話を続ける。

「では、トリファさんと。

どうやって手伝っていただけるのですか？

このゼファーは非常にデリケートな兵器なモノで、理想的な演習場所は…。

そう、戦術機がないBETAだけの場所ですね。そんな場所に送り届けて頂きたいのです。」

まあ無理でしょうが、と彼は内心想いつつ言った。

「…危険ですね。

ただ、結論から申し上げますとバルト海までなら送り届けられます。」

「もしや…あれを？」

重三郎が初めて口を開く。

「はい、潜水艦を使います。

U - b o o t X I X 型を3隻までなら用意できます。」

「貴方は正気か？」

大戦中の兵器ですよ！？

それに人員は何処から手配するのですか！？」

一貴が声を荒げながら問う。

「人員は私が集めます。

この潜水艦は我々が亡命した時に使用した船ですから。

U - b o o t X I X 型と言いましたが外見、内部もその時とは全く異なり、緊急用の輸送船です。

ですがご安心ください。

性能、速力や静粛性どれをとっても従来のそれを上回ります。

それと、私は正気です。

どちらかというと、貴方の正気を疑いますが？」

これには言い返せない。

そもそも無理を言ったのは一貴なのだから。

だが、妙な話である。

トリファの言う事が本当ならば、亡命したナチスは膨大な資金力と技術力を未だ保持している事となる。

しかも、今回使われる船は緊急用、通常はどんな船を使っているのだ？

…ある噂を聞いたことがある。

ナチスドイツは魔術を使っていた。

ヒトラーは魔術師に操られていたに過ぎず、黒幕は別にいる。

そして、その魔術師が B E T A を呼んだと。

まさか、彼らがそれなのか？

トリファの目は真っ直ぐ一貴をとらえている。
一貴は咳払いをしつつ眼鏡の位置を戻す。

「失礼。」

では、見返りは何を？」

それを聞いたトリファは拍子抜けした顔をし、頬を引きつりあげ突然笑い出した。

「ははっ！失礼。」

流石は天木家のお方だ。

私は初めに重三郎様の恩に報いる為と申し上げたが、無償と解釈しなかったか。

結構、結構。素晴らしい。

あの時を思い出しますよ、重三郎様。」

そう心底楽しそうに重三郎に同意を求める。

そして、私の”息子”だからな、と答えていた。

「では、一貴様、1つだけお願い事を。

私の命はもうすぐついでる事でしよう。

そこで、私の息子ヴァレリア・トリファが困った時、助けてはくれませんか？」

「わかりました。その時は全身全霊を持ってお助けいたしましょう。」

言い終わったと同時に双方ソファから立ち上がり力強く手を握り合った。

第2話：Phantom（後書き）

U - b o o t X I X 型

UボートX I V 型の後継艦で補給用潜水艦で、リアルだと完成してなかった筈です。

マブラヴの世界ではナチス・ドイツ最強だったようなので、完成。彼らが乗る船は、もはや大戦中のモノではありません。

全長：99・3メートル

全幅：10・2メートル

浮上航行時：15・8 ノット

潜航時：30 ノット

主機：？？？

排水量：？？？

改造型 F - 4

F - 4 にして F - 4 にあらず。

外見は統一中華戦線 J - 8 殲撃8型です。

内部は”より人間に近い機動”が可能なように改良されています。

つまり、従来の戦術機に搭載されている、電磁伸縮炭素帯ではなく、カーボニック・アクチエーター電磁収縮筋（通電により伸縮する形状記憶プラスチック）を使用しています。

電磁収縮筋は内海さん考案で、榊班長も整備出来ます。

管制ユニットも独自設計で、脱出機能はありません。

基本OSは内海さんだけあって”ASURA””改”ですが、一貴がつくってます。

なんだか話が見えてきましたね。

トリファさん、クサ過ぎですね。

それでは

第3話：遺憾の意（前書き）

一貴が壊れます。

やっとラブラブのキャラがでます。

今回は長め……？

第3話：遺憾の意

「ごきげんよう、天木様」

「う、ごきげんよう…」

なんで俺が…小学校にはいらねえといけねーんだよつ!!!
と内心叫びながら、学校の昇降口の前で怒りの舞をしているのが、
天木一貴その人である。

この学校は、斯衛関係者が入学する初等科であり、名門中の名門と
されている。

まず、マナーの講座から始まり、茶道、華道、武道…あらゆる道を
たたき込まれる。

しかし、彼には関係ない。

もうすでに、大人の世界に踏み込んだ一人のビジネスマンであり、
重三郎に指南を直接受けた天木家の次期当主である。

実際、義務教育と言っても「一身上の都合」から通信制教育に移行
できるのがこの学校である。

それをしなかったのは、じじいこと重三郎のせいである。

ことの始まりは1年前のF-4「Zephyr Phantom
System」の試験結果だ。

「良い結果が出ぬ場合はお前を小学校へ行かす。」

「良い結果が出た場合、おじいさまには隠居して頂きましょうか。」

潜水艦内で二人の視線に火花が散る。

その様子を見ていた潜水艦内の兵士達はため息をつきつつ、試験地の情報を集め、自らの職務を全うしていた。

兵士…。

そう、彼らの姿は兵士そのものだった。

ナチス・ドイツ時代の海軍の制服。

タンカーを使つて、沖ノ鳥島の南西50km先で彼らと合流したが本当に異様だった。

我々の出迎えには全員正装をし、右手を上上げる独特の敬礼をしてきた。

「Achtung!」

「「Sieg Heil!」」

いつの間にかSS（親衛隊）の制服を着込んだトリファが短く返礼をし内部に入る。

艦の運航は大尉の階級をした者が行い、一人一人の業務が階級によって決められている。

軍隊そのものだ。

一体全体こいつらは…。

「周囲に敵影無し。」

「よし、アップトリム15度、無音浮上。僚艦にも伝える。」

浮上と同時に甲板要員緊急配置。ハッチを開き輸送ヘリ発進。」

「Jawohl! Herr Kaleun!」

目的地についたようでCICが慌ただしくなる。

ヘリだと光線級にやられると思うのだが、大丈夫らしい…

ゼファアの装備は青龍偃月刀、三国志の武将、関羽が使用していたと言われる通称青龍刀。

その形を模した、高周波ブレード。

そしてA-97突撃砲を2丁装備している。

一貴達は潜水艦に設けられたゼファア専用のコントロールルームで試験場所に着くまで待機する。

すると無線が入りゼファアを”投下”したと連絡が入った。

彼らの番である。

「全システム解放。アーマープロテクト解除。
システムオールグリーンです。」

「さあ、やってくれ。」

起動!ゼファアファントム!」

リトアニアに1機だけ降りた戦術機のメインモニターが赤く光り立ち上がる。

装備していた青龍刀を片手で回転させながら構える。

その先には黒い津波と化したBETAが此方へ向かってきていた。

恐れもせず、臆することなく、ゼファアは彼奴等を切り裂いて行く。

その姿はまるで黄泉の国から舞い降りた関雲長その人に見えた。

ゼファアの通る道はBETAの屍が、うずたかく築かれていく。光線級が視界に入れば他のBETAを盾にして接近、殲滅。要塞級に出会えば刺身にしてしまう。

戦闘開始から僅か10分、無傷で戦い続けているゼファア。もはや、コンバットプルーフには十分な戦果を挙げ、一貴の勝利は間近だった。

重三郎の本心は”子供”に十分な青春を送って欲しいという親心から来たもので、戯れにあのような賭け事をしたわけではない。そして、本人はそんな”親心”を理解できるほど”大人”ではない。しかし、一貴は最初こそ意気揚々としていたものの徐々に顔色が悪くなる。

現状、冷静になって戦況を理解しているのは重三郎と彼のみだ。

「ゼファアを回収する。私の機体を出すぞ！」

一人の技術者が満面の笑みでそれを制する。

「坊ちゃんが行くほどの事ではありませんよ。」

ゼファアが片付けて簡単に帰ってこれますよ。」

BETAへのキルスコアは優に”5万體”を越えており間接部分が焼け落ちるまでに猶予が無い。

「全員目を覚ませっ！！」

BETAの数が多すぎる！5分間で5万體：ヴォールク・データの3倍だぞ！

「どう考えても異常だ！」

すでに発進準備が完了していたヘリに乗り込み、ゼファアの回収地点に急行した。

そこは、異常な光景だった。

ゼファアに群がるBETA。

ヘリや一貴が近づいても殆どが反応しない。

ゼファアのみに攻撃しているのである。

パイロットは破顔しつつもHQを呼び出す。

「HQ、こちらゼファア回収班、over。」

「ゼファア回収班、こちらHQ、over。」

「HQ、こちらゼファア回収班。

break、予想よりBETAが多い。いや、多すぎる。

ポイントθ以外を焼き払ってくれ。break over。」

「ゼファア回収班、こちらHQ、了解。15分待て。out。」

15分後、回収支援の為に潜水艦からトマホーク（RGM/UGM-109D TLA M-D）が全弾発射され、周囲はクラスター爆弾により一時的にクリアになった。

それと同時に一貴は戦術機と共にヘリから降り、ゼファアの回収を開始した。

だが、BETAの攻撃はやまない。

3分も経たない内にあたりはBETAで埋め尽くされる。

一貴もそれに負けず劣らず彼奴等をさばいて行く。

まるで時が止まっているかのように。

「クロノス1、こちら回収班。」

このままでは回収不能。対象の破棄を提案する。」

一貴のコールサインは決まっていなかったが、どうやらそれがそうらしい。

ヘリは上空をホバリングし続けている。

「回収班、こちらクロノス1。」

却下する。もう一度トマホークで焼き払った後、5分間もたせる。回収が可能か？」

「不可能だ。せめて15分無ければ出来ない。」

「ならば、ゼファー本体の回収はどれくらいで出来る？」

本体。

つまりはパイロットルームのみを外し回収すると言っていることである。しばしの沈黙の後通信がくる。

「こちら、回収班。」

クロノス1の機体を回収しない場合、それを含めて5分で完了する。」

「クロノス1、了解。それで構わない。」

「flash、flash、flash、こちら、HQ・All commander。」

状況は把握している。このままであれば海岸沿いの回収が望まし

い。

座標 A D - 3 5 2 3 繰り返す、A l f a - D e l t a - 3 5 2
3を回収地点としたい。

20分後トマホークを発射する。t h a n k y o u o u t .

「H Q、こちら回収班、了解。o u t .」

「H Q、こちらクロノス1、了解。

管制班、ゼファアの誘導頼む。b r e a k o v e r .」

「こちら管制班、了解。o u t .」

結果的にはゼファアを回収することが出来た。

しかし、残念なことに改造型F - 4を2機放棄する事となってしまう
った。

だが、一番の問題はゼファアを実戦で使うことが出来ない、と
いうことである。

先の作戦で海岸沿いまで後退し、ゼファアのコックピットを一貴が
引き出した。

するとB E T Aは一貴のみを狙うようになり回収どころの話では無
くなってしまったのだ。

結局、ゼファアの内部電力を破壊する事によってB E T Aの発生数
を減らし事なきを得た。

「Z e p h y r P h a n t o m S y s t e m」の試験結果は以

下の通りとなった。

- 1、対BETA戦における戦闘能力は、非常に強力である。
- 2、対人戦における戦闘能力も、非常に強力である。
- 3、しかし、いずれの場合においても、戦術機自体のトータルスペックがシステムに追いついていないのが現状である。
- 4、対BETA戦において、何らかの理由によりBETAを誘引している。

以上から戦闘能力に疑いの余地を挟む所はない。

しかしながら、現在の戦術機のスペックでは対BETA戦において有効な戦略立案が出来ない。

また、BETAを誘引する理由が解明されない限り、他の部隊を危険にさらす事となる。

よって当該システムは、実戦において使用することが著しく困難だと判断される。

このような判断があったため、ゼファーは修理を終えた後、改良型F-4に換装され厳重管理のもと動態保存となってしまうた。

と、思い出した一貴の怒りは激しさを増し、もはや能のような動きと化している。

地団駄を踏んでいるようなその足は一定のリズムを刻み、まるで何かを呼び出すかのような…

「貴様が天木一貴だな！」

ずびしっ！と擬音がする勢いで指を指す、凜とした女性が二人彼の前に立ちはだかった。

先頭の女性は鬼の形相で睨めつけ、もう一人は眼鏡を掛け、後ろに佇んでいる。

「何か用かつ！今日は八日かつ！！」

俺は今忙しいのだ！！」

主に怒りの表現で…

「私は五摂家の方々をお守りする赤を授かりし、月詠真那！」
「同じく姉の月詠真耶」

堂々と名を挙げる両者。
だが、彼は意に介さない。

「マナだが、カナだかしらねえが、俺は忙しいっていつてんだろっ
があああ！」

一貴は自分でも何を言っているのか解っていない。

寝る間も惜しんで開発したゼファーが、使えないと言われたショックと、重三郎のかけに負けた悔しさをどのように発散するか考えている最中なのである。

しかし、真那と真耶もそんな彼の心情を意に介さず、一つの赤い字で書かれた封書を目の前に出し宣言する。

「貴様に決闘を申し込む！！」

そんな状態を見ていた野次馬達は一瞬凍り付く。

「はああああ？？？？」

馬鹿か！？このジャリ！！

この俺に果たし状を送るなんざ10年早いわ!!
その貧相なミニマムおっぱいがあの丘を越えるまで、出直してこ
いっ!!

話はそれからだ!!」

そして、彼の発言を聞いた真那は顔を真っ赤にし反論する。

「なにがミニマムおっぱいじゃあ!この白人野郎!!
ヤンキー魂見せてみるってんだ!!
しかも、てめえもジャリだろうが!!この餓鬼っ!!」

「んだと、このアマあ!!」

俺は白人じゃねえ!体質なんだよ、阿呆!
嘆きの壁のおっぱいがしゃべるんじゃないよ!!」

「おっぱいおっぱいと!!この、下衆め!」

「はあ?おっぱいの素晴らしさが解らんとはな!
はっ!お前は一生おぼこだ!!」

「なっなんだと!」

「やゝいやゝい、お・ぼ・こ!」

双方共に顔面が付きそうなくらいガンを飛ばしている。
ため息を付きつつ真耶が間に入る。

「天木一貴。我らの果たし状、確かに渡したからな。」

ちよっと真耶…と真那は抗議しているがずるすると引っ張っていく。

行き場のない怒りを抱えながら、一貴は果たし状を受け取りその場を後にするのであった。

第3話：遺憾の意（後書き）

マナさんブチ切れですね。

以降マナ、マヤはカタカナ表記にします。

なんで果たし状？？次回にその説明をします。

青龍刀：薙刀にしようかと迷いましたがJ-8なんで。

なぜ殲撃8型なのか、それはラウンドモニターがカッコイイから！！
それだけの理由です。

他の機体は銃を撃ちますって感じで、あまり好きじゃありません。

また、日本刀よりも槍の方が強いと思いますし・・・

これは筆者の思い込みです。

ヘリはナチスの新兵器で一貴達もその構造について理解していません。

中型ヘリで戦術機1機乗せられるスペースがあります。

それ以上は不明です。

筆者は美乳が好きです。

それでは

第4話：養父の気持ち（前書き）

早めの更新です。

養父と書いてオヤジと読みます。

今回はじじい中心です。

それではどうぞ。

第4話：養父の気持ち

校門をくぐると黒塗りのセダンが6台止まっており、周囲には強面の人間が立ち周辺を警戒している。

一貴を見つけると同時に彼を囲み車まで先導する。

「一貴様、お帰りなさいませ。」

と初老の男性がドアを開け頭を下げる。

「ご苦労。」

そう言つて車内に入り車が発進する。

ふうつ…とため息を付き隣を見ると重三郎がいた。

「げっ！じ…」

「じ？」

「お、おじいさま、居るならいると言つてください。
びっくりしましたよ。」

「ほっほっほ。学校にいるお主にどう伝えるのじゃ？
それよりも、いつもより車が多いことに気づかなかったのかの？」

それは…失念していた。

果たし状の事ばかり考えていたのだ。

なぜなら、一貴は初等科に入って初めて私的な会話を果たしたのが
月詠マナ、カナだったから。

入学当初からあらゆる科目でトップクラスだったこと、五撰家の一部は彼の正体を知っている事、肌が白く欧米風の顔立ちをしている事：等々が災いして、彼の周りに同世代で話しかけてくる子など皆無だった。

しかも、”あの”重三郎の御曹司ともなれば風当たりも強い。

正直に言うとどんな形であれ、話しかけてくれた事に彼は嬉しく感じていた。

「いえ…その…」

と、もじもじと手に持っている封書を隠そうとする。
だが、重三郎は知っていた。

「ほっほっ。果たし状か。儂もよくやられたもんじゃ。」

「は！？」

なんで知っているんだと言わんばかりの顔で重三郎を見る。

「どれ。見せてみよ。」

一貴が惚けている間に手元から封書を奪ってしまふ。
手をバタバタさせて奪い返そうとするが身体の差でとれない。

「なになに。」

『我が家、月詠家は代々五撰家を守護する家系なり。』

天木一貴殿は紅蓮中将に認められ、次期煌武院家当主の護衛の推薦を受けていると聞いた。

一貴殿は天木重三郎様の実子ではないと聞く。

そのような者が五摂家を守護することはまかり成らん。

我ら、月詠マヤ、マナは貴殿のような得体の知れぬ者に護衛が務まるとは考えられぬ。

故に、貴殿に決闘を申し込む。

明日の放課後、道場にて待つ。』

…とんだ因縁をつけられたものじゃの。」

それを聞いた一貴は舌打ちをし、ぼそぼそと何かを言い出した。

「あの糞アマあ…俺は別に護衛なんざやりたくないわ！」

「ほっ！？なんか言ったかの？」

「い、いえ。別に…」

ニタニタと笑いながら一貴を見る重三郎も内心喜んでいた。

彼の現状を知っていたし、何よりも心配だった。

普段自分の感情を押し殺して過ごしていた一貴は誰に対しても敬語だった。

それが崩れた喋り方をしている。

本当に嬉しかった。

「お主はどうするつもりかの？」

お主の実力ならば簡単に勝てるじゃろ？」

「まあ、でも…」

そうこうしている内に家に着く。

一貴はぶつぶつと言いながら家に入って行く。

重三郎はそのまま紅蓮 醍三郎のもとへ車を走らせた。

紅蓮 醍三郎。

無現鬼道流の師範代で帝国斯衛軍中將の階級を司る者である。

次期斯衛軍大將とも言われており優秀な人間である。

武術においても人並み外れた能力を持ち合わせた人物だ。

しかし、武術の点で言えば重三郎に勝った事はない。

樹雷式武術。

天木家のみに伝わる武術であり、この世で扱えるのは重三郎と一貴、二人しかいない。

一貴と紅蓮は三度手合わせをしているが、その内二戦は引き分け、一戦は一貴の負けという結果である。

年齢を鑑みるにそれだけでも一貴の異常さが理解できるだろう。

ちなみに、紅蓮は重三郎以外には負けたことがない。

紅蓮宅に車が着くと軍服姿の醍三郎が出迎えた。

「お久しぶりです、重三郎様」

「うむ、久しいの、息災か？」

「御陰様でございます。そちらもお元気そうで何よりです。

ここではあれなので、どうぞ中へ」

門を通され客間へと移る。

「して、今日はどういったご用件で。」

そう、急な来訪で紅蓮も驚いていた。

普段の重三郎なら3日前には連絡が来る。

それが今回は険しい声色で電話がかかってきた。
当の本人は気が気ではない。

「うむ…その事なんだが…」

ゴクリ…紅蓮は汗を垂らしながら言葉を待つ。

「家の一貴に…果たし状が届いてしまったのじゃ…！」

儼はもう、心配で心配で。

もし怪我をしてしまったらどうしようとか、相手を殺してしまっ
たらどう処理しようか…

もう！どうすればいいのか解らん…！」

紅蓮は後ろにひっくり返っていた。

「ほっ！…どうしたのじゃ？」

「あ、いえ…」

心配して損した、という顔をしつつ話を続ける。

「誰からの果たし状なのですか？」

「それが、月詠の娘子のようなんじゃ。」

「は？…どうしてまた？」

「ほおゝ知らんと申すか。」

目を細くし、ドスのきいた声で紅蓮を睨む。

紅蓮は冷や汗をかき、しかし、冷静に考える。

だが思い当たる節がない。

紅蓮は首を横に振って答える。

「そうか。」

主は儂の息子を次期煌武院家当主の護衛に推薦していると聞いたが？」

「それは…現当主との酒の席の話で良い男がいる、という話をしたまでです。」

と、否定的な立場を示した。

どうやら食い違いがあったらしい。

すると紅蓮はハツつとした顔となり恐る恐る問うてみた。

「まさか、月詠はそれで…」

「そのようじゃの。」

「も、申し訳ありません!!」

真つ青な顔になった紅蓮は土下座を決め込んだ。

勘違いをした張本人ではないものの、この事態を招いた事の一因は自分にあつたと思つたらしい。

だが哀れな紅蓮、重三郎の思惑通りとなつてしまった。目が光っている。

「うん。まあ許さんでもない。
ただ、とある約束をして貰いたい。」

土下座をしている紅蓮からは彼の顔は見えない。

「して、約束とは？」

「うむ。」

一貴はとても大事な子じゃ。

それは儂にとっても、五摂家にとっても、日本にとっても、
だからの、紅蓮。

息子が、本当の息子になった時、支えてやってくれんかの。
あの子には敵が多すぎる。

すまん。このとおりじゃ。」

重三郎も土下座をした。

紅蓮は何も知らない。彼の素性、経歴を。

彼の言っている意味はわからない。

だが、その雰囲気は有無を言わせない迫力に満ちていた。

「重三郎様！おやめください！」

当然慌てふためく。

「いや、受諾して貰うまでは上げられん。」

「お受けしますのでどうかお上げください！」

その言葉を聞いた重三郎は安心した面持ちで顔を上げた。

「よろしく頼むぞ。紅蓮。」

「はっ、御意に。」

「よしっ！」

今日は儂が酒をおごろう！

行くぞ紅蓮！」

先ほどの雰囲気とは打って変わって朗らかな調子で紅蓮を誘う。

「まだ5時ですよ!？」

それに決闘はどうするのですか?」

「いいんじゃない!その件は一貴がどうにかするでの!行くぞ!」

と無理矢理彼を引っ張っていく。

紅蓮はまだ知らない。

これが紅蓮と重三郎の最後の会話となることを…

第4話：養父の気持ち（後書き）

じじい＝クソババアです。

瀬戸の再来のつもりで書いているのですが味が出ませんね…

樹雷式武術、なんでマブラヴの世界に！？

強いです、めっちゃ強いです。

だって宇宙一ですから。

下手したらBETA切れます。

マジで。

それでは。

第5話：修羅の道（前書き）

マヤとマナのキャラが難しいですね…

第5話：修羅の道

放課後の道場。

そこには腕組みをし、人差し指をイライラしながら動かしているマナと、ジッと時計を見つめているマヤがいた。

彼女らがここに着き30分が経過したところでマナはキレた。

「遅い！！」

あのオカマ野郎、逃げ出したんじゃないだろうな！！」

比較的冷静なマヤは震える声で諭す。

「そんな事はないだろう…まさか、な…」

オカマ野郎…これは彼に嫉妬した人間がよく使う言葉である。

一貴の顔や肌は非常に美しい。

見るものを魅了し酔わせる不思議な力がある。

しかも、それを感じるのに男女の関係は無い。

普段、彼は眼鏡を掛けておりその素顔を確認した者は誰もいない。

もし仮に、眼鏡を取ったら”とんでもない事”になるといのが定説だ。

当の本人はその事を理解していない。

いや、理解をしているが彼らの定説とは違う意味で、だ。

故に彼の周りにいる”女性”は基本的に不戦の条約を結び、彼が話しかけてこない限り接触を持たない。

そうゆう事情もあり男性陣には、とことん嫌われている。

そんな好き勝手な妄想をされている本人は、道場の外で様子をうかがっていた・

「はあ…、覚悟を決めようか。」

そう呟いて戸を開く。

それに気づいたマヤは目をこれでもかと開き睨みつけた。

「貴様！！何時だと思っている！」

一貴はため息をするのを堪えて社交スマイルをした。

「月詠マナ、マヤさんお久しぶりです。」

いや、少しばかり用があつたもので…」

「御託を並べんでも良い…始めるぞ。」

マヤは懷から真剣を取り出す。

しかし、一貴は表情を変えずニコニコとしている。

「これはこれは、恐ろしい。」

いえね、刀を交えずともお話をしようと思ひましてね。」

「「その必要は…ないっ！！」」

2人は短刀を逆さに持ち、つま先に力を入れ同時に斬りかかる。

その太刀筋、流石は月詠家、見事なものだった。

時間差で一貴の急所を突いて来る。

目。

首。

脇。

手首。

心臓。

腹。

金的。

ありとあらゆる場所を的確に、しかし、高速に。
常人であれば確実に100回死んでいる。

だが、彼は樹雷式武術を極めし者。

”そんな”攻撃は見切られ、紙一重の所で全て躲していく。

月詠達の息が上がり始めたところで後ろへ跳躍する。

そして、未だ笑顔を絶やさず言葉を繋げる。

「名乗りも上げず斬りかかるとは、穏やかではありませんね。

ここは穏便にお話を…」

「ば、か、なっ…」

ハアハア、何故だっ…」

何故息も上がらず汗もかいていない？

そう聞きたいようだが、正直彼女らは酸欠でホワイトアウトしかかっている。

「あのですね…」

一貴は少し困ったような顔で、人差し指で頭をかく。

「私はその件については何も知らないですし、そもそも護衛なんて

興味がないのですよ。

ですから、その件は私の方から正式に辞退させて貰うつもりなのですが。」

そう、彼には関係がない。

彼は、今は天木の姓を名乗っているが元は五摂家の一角、崇宰の出身だ。

彼にとってはどうでも良い話で、本来は守られる側なのである。しかし、その言葉が不味かった。

「っ！貴様あ！

赤を司る斯衛が護衛をどうでも良いだと！？

斯衛の誉れを何だと心得るか！

まさかとは思ったが、貴様、外人か！？

ならばここで、死にさらせっ！！」

先の発言にはマナもキレさせた。

彼女たちにとっては斯衛の任務こそが生き甲斐であり名誉である。それを蔑ろにさせることはこの世で一番許し難いことだ。

息が切れているのにも係わらず2人とも突きを入れてくる。

だが、一貴にとっても”外人”という言葉は唯一のコンプレックスであり逆鱗である。

2人の突きを交互に脇で挟み一時的に拘束する。

「ほお、外人ですか…

はははは…私は真正正銘日本人ですが何か？」

そう言うのと彼の額には青筋が立ち、ドスのきいた声を出す。

「クククッ…」

そう、そもそも、お前らが喧嘩を売ってきたんだよな？

ああ、そうだった。なら遠慮なんていらねえよなあ？

なあマヤ、マナ？」

彼の顔は既に穏やかなものではなく、鷹のような目つきに変わり、口元は張り裂けそうな程に上がり、鋭利な犬歯が強力に自己主張し、おぞましい笑みを浮かべている。

黒く澱んだ空気が周囲を包んでいく。

そして、彼女達の手首をつかみ上げ一気に力を込める。

うめき声を上げるマヤ、マナ。

一貫の放つ闘気に当てられ脚や歯、腕は小刻みに震えている。

彼女らの気力は完全に削がれ、持っていた懐刀は手から滑り落ち畳に突き刺った。

「そのような力量で私に勝負を挑もうとは、片腹痛いわ。」

そのまま彼女達を壁へと叩きつけた。

間一髪で受け身を取り辛うじて意識は保っている。

「くっくっ…」

どうしようもない者を相手にしている。

それを理解したが、時は既に遅し。

勝負を持ちかけたのはこちら側なのだ。

彼女らは、最後の力を振り絞って殴りかかったが、勝負はもう既についている。

易々と避けられ、逆に腹部を強打される。

「ふん、狗め。」

所詮、狗では私を倒せない。

だがその根性だけは認め、生かしてやろう。

さらばだ、月詠マナ、マヤ。」

その言葉を聞いて彼女達の意識は途絶えた。

「ふう……」

ため息をついて我に返る。

一貫は、これだけの事をすればもう立ち向かってくることは無いだろう、と内心想いつつ気絶している彼女達を見る。

目立った外傷は無い。

美しい女性なのだから傷でもついたら不味いという彼なりの最大限の配慮だった。

「20分もすれば目も覚めるだろうか？」

独り言を言いつつ自分の上着を脱ぎ彼女達にそっとかけ、道場を出た。

すると、やはりというか、何というか重三郎が佇んでいた。

「済んだかの？」

優しく語りかける。

「どうせ、最初から見えていたのでしょうか？」

その顔はあきれた表情、悲しみの表情、様々な感情がいり乱れたものだった。

今回の件でまたつまらない日常へと戻っていく。

決闘を受ける前から覚悟していたことではあるが、やはり悲しい。

そして、その表情を読み取られないように、迎えの車を待たしている方へ歩く。

その気持ちを重三郎は知りつつも彼を呼び止める。

「次期煌武院家当主の護衛は受けるのかの？」

歩みを止め、少しばかり考えるそぶりをした後答えた。

「私は赤を司る斯衛ですから。」

「そうか…。その旨、煌武院家に伝えておく。」

「他の五摂家は黙っていないと思いますか？」

「ほっほっほ、大丈夫じゃ。」

お主の修羅道は、まだまだ始まったばかりじゃ。

ここで歩みを止める訳では無かるうに。」

それもそうですね…と小さく呟いてその場を後にした。

第5話：修羅の道（後書き）

フルボッコ…かな？

一貴はひとりぼっちのままです。

でも多くの大人達が彼を見守ってくれています。

そうゆう事に気づくのは何時だって遅いものですよね。

ここで、一貴の設定を少々いじります。

眼鏡を掛けているとき、黒目に見えるというのはそのままです。

ですが、眼鏡着用時はウォルター少年、青年。

眼鏡を外したときはアーカードと言った具合に変更します。

凶悪さの演出です。

それでは

第6話：表面化する陰謀（前書き）

筆者は陰謀論者ではありません。
残酷描写が入ります。

第6話：表面化する陰謀

駐日米大使館に一通の封書が届く。

宛名もなく、切手も貼られていない、端から見ると危険な郵便物である。

しかし、駐在武官はそれを見るなり箝口令をひき、大使館の内部で一番秘匿性の高い部屋へ移動した。

扉を開けるとそこには、初老の男性がパイプをふかしながら、目をつむり座っていた。

武官は敬礼をした後、その怪しげな茶封筒を開封し内容を確認する。全文を読み終えると火をつけ、近くの灰皿に投げ捨てた。

「どうやら暗殺に失敗したようです。」

「そうか…。本国へは私から連絡しておく。」

駐日米大使マイケル・マンズフィールドは渋い顔をしつつ答える。

武官は、今日は何も見えていません、と述べた後退室する。

その姿を見届け、マンズフィールドは通称”Supermant ube”と呼ばれる公衆電話ボックスのような極秘通信用の個室へ行き、ホワイトハウスへ報告を上げた。

報告だけのつもりだったのだが、そのまま大統領へと通信が回される。

どうやら直接聞きたいようだった。

「暗殺は失敗したかね？」

「!？」

大統領それはどういう事ですか？

暗殺をご命令なさったのは大統領ご自身ではありませんか！

A m a k i F a m i l y は日本にとっても世界にとっても重要な人物だったのですよ！

その暗殺指令をまるで望んで無かったかのような…」

マンスフィールドは戸惑い、つつい声を荒げて問い詰める。

しかし大統領は失態を気にせず、彼の言葉を妨げ再度質問した。

「それでどうだったのかね？」

「失敗しました…」

受話器からは、ため息と共に椅子に座る音が聞こえてきた。

「この通信はチューブからだったな。」

「はい、その通りです。」

「私はあの時、君に日本との架け橋を、そして平和を頼んだ。

日本という国と共に歩み、極東の B E T A 侵攻食い止める為に。

今回の件、A m a k i K a z u k i 暗殺命令はそれに矛盾している事だ。

本当に済まないと思っている。

だが、あの命令は私が出したものではない。

その偽の命令書を知った私は A m a k i Z y u u z a b u r o u に連絡したのだ。

息子が狙われている、と。」

「そんなことが！？」

いえ、私も貴方がそのような命令を出すわけが無いと思っています

したが…

まさか、そんな…

では、ホワイトハウスに裏切り者がいるということですか？」

「… ホワイトハウスだけではない。

アメリカ、そして日本にも”彼ら”のシンパがいる。」

「”彼ら”？彼らとは何者なのですか？」

そこでまた大統領はため息をつく。

「それがよくわからんだ。

Z y u z a b u r o u から聞いた話では、A m a k i K a z u k i 暗殺に関して赤の斯衛が絡んでいたそうだな。」

「ええ、その通りです。

T u k u y o m i … なんとらを差し向け殺す予定だったそうで。日本の文化には H a t a s h i z y o ? なる決闘で公然と殺すとの話でした。

子供同士で斬り合いとは非常にカルチャーショックではありましたが。」

「それだけか？それしか聞いていないのか？」

「CIAからはそう聞きましたが？」

「… そんな内容で K a z u k i を暗殺出来るはずがなかつた。実は、今朝ホワイトハウスの前にスーツケースが4つ置かれていた。

当然報道されていない。この意味がわかるかね？」

「いえ…わかりません。」

「4つとも屈強な男性の死体が入っていた。米軍が支給している迷彩服と銃込みでな。体は鋭利な刃物で”さばかれていた”。

そして丁寧に首が切られスーツケースの上に並べられていたよ。また、同様の死体が日本でも発見された。そっちは日本人だったようだが、こっちは米国人だった。しかも、”すでに死んでいるはずの”。」

「CIAが私に嘘の報告を？既に死んであるはず？わ、訳がわかりません…
どういう事ですか！大統領！！」

「そう、焦るな。」

その後、Zyuzaburouから連絡が来たよ。決闘の邪魔者がいたと。

まあ、こんなにダイレクトには言わなかったがね。

そして、4つの死体を調べたところいずれも元合衆国陸軍特殊部隊所属隊員だった。

私も知らない部隊があるのだろう、この国には。

ここからが大事なのだが…

彼に言わせると”キリスト教恭順主義派”が絡んでいるというのだ。

だがそのような組織名はいくら調べても出てこない。」

「私も聞いたことはありません…。」

「そこなのだよ…。」

なぜ彼を敵視しているのかわからん。

我々はBETAの他にも敵にまわしているようなのだ。

我々米国にとって彼の死はBETAとの戦いにおいて札を一つ失うのと同じだ。

君にも協力して欲しい。」

「わかりました大統領。

極東の平和のためにも必ずや。」

「頼んだぞ。マイケル。」

「はい、レーガン大統領閣下。我が合衆国に平和と栄光を。」

そのまま受話器を切る。

自分の直ぐそばにも敵がいるとマンスフィールドは実感した。彼は大統領の為にその足を動かし始めるのであった。

第6話：表面化する陰謀（後書き）

瀬戸様のような女性はいいと思います。
最高です。

なので重三郎を鼻屑します。
暗躍します。

キリスト教恭順主義派の情報は当然のごとく、ナチからもたらされました。

それでは

第7話：友愛＋（前書き）

10 / 18

月詠マナ主観です。

若干の描写変更という形をとりました。

第7話：友愛＋

「本日、日本時間10時30分頃、米合衆国レーガン大統領は銃撃による大量失血により、大学病院で死亡が確認されました。これを受け副大統領である…」

「暗殺を企てたと思われる人物は当局によって現行犯逮捕されたものの、警察署へ送致中に射殺され…」

「大統領の死亡を受け、帰国中だった駐日米大使マンスフィールド氏を乗せた飛行機は、依然、北太平洋で通信が途絶しており…」

テレビのチャンネルをいくら変えても同じ事ばかりだ。
米国の大統領がどうこうなっても日本には関係ないではないか。

「ふう…ッ！」

痛い。

肋骨が折れているのだ。

マヤ、私の姉は軽傷で直ぐに学校へ行ったが、私は全治5週間の重傷と医師に診断されてしまった。

故に入院中だ。

そもそも、その原因は私達にある。

天木一貴に決闘を挑んだ…そして負けて…

…先日、紅蓮中將がお見舞いに来てくださった。

「月詠よ…決闘に負けたそうだな。」

「これは紅蓮中将閣下お恥ずかしいところを。」

ベッドから起き上がるうとするマナ。

「いや、けが人は寝ておれ。」

紅蓮の大きな手でその動きを制す。

「お心遣い感謝いたします。」

大きなメロンと花を持って来た紅蓮は、そのままメロンを切り始める。

部屋にいた侍従は花を飾り終わると部屋を出て行く。

「なあ月詠よ、何故天木一貴に手を出した？」

マナの目を見ずに軽い口調で問うた。

「それは…、紅蓮中将こそ良いのですか!？」

あのような怪しげなる奴が煌武院家の守護をしてっ!」

そこまで言っつてうずくまる。

腹に痛みが響くのだ。

切り終えたメロンを皿に移しつつ紅蓮はため息をつく。

「はあ…、天木殿の何処が怪しいというのだ。それに煌武院家の護衛などという話は上がっていないぞ？」

「は？紅蓮殿はご存じないのですか？

ある権力者が煌武院家の護衛に、彼奴を推薦したのですよ。

あんな怪しい天木家を押すなどとは笑止千万。

明らかに没落の一途を辿る天木家を生きながらえさせようとする商人の考えに決まっています。

聞くに、あの天木家はアメリカに兵器を売り莫大な利益を得ているそうでは無いですか！

これはもうアメリカの命令に違いありません！

あの汚い商人どもがアメリカに媚びを売って儲けをさらに出そうとしているのです。

煌武院家の護衛をし、発言力をつけようとする魂胆が丸見えです！」

紅蓮は話を噛むように聞きメロンを月詠に差し出す。それに礼を言ってマナは食べ始める。

「そのような世迷い言…一体誰が…」

独り言のように紅蓮は呟く。

だがマナはその言葉を聞き逃さない。

「世迷い言とは紅蓮閣下！

私達はあの有名な児玉誉士夫様から直に聞いたのですよ！」

ハツとした顔をした月詠。

実は無理を言って聞かせていただき、秘密に、と言われていたのだ。

「…月詠。それは真か？」

マヤはそのまま俯き、小さくうなずいた。

「はっはっはっ！」

月詠、児玉様に一本とられたなあ！」

励ますように月詠の肩を叩く紅蓮。

「えっ。」

「児玉様はからかわれたのだよ。

その様子だと、しつこくお尋ねしたのだろうか？

ある権力者とは私のことだ。まあ、推薦はしておらんがな。

誤解がないように言っておくが、彼が武術に長けているという話を煌武院様にお話したただけだ。」

「し、しかし、確かに護衛に推薦されたと…」

「何かの聞き間違えではないか？

煌武院様がとても関心を持っている…という言われ方をしたのでは？」

「言われてみればそんな気も…」

「はっはっはっ。そういう事だ。

一貴殿には謝っておくのだぞ。」

「で、ですが…」

いまさらなんと言えはいいのか分からなかった。

「大丈夫だ。彼は優しい子だよ。

現に君たちは”生きて”いる。

肋骨が折れた程度で良かったではないか。

彼に言わせれば、を殴るのは心苦しかったようだぞ。

実際顔を殴っていないしな。」

「それは一体…？」

「分からのか？罪だなそれは。

可愛らしい顔を傷つけたく無かったのだよ、彼は。」

そこで月詠はキョトンとした。

確かに顔を狙ってこなかったし、体を見渡す限り目立った外傷は無い。

手加減をしてくれていたのか…。

それに…今までにそんなことは言われたことがなかった。

とたんに顔は赤く染まり、心なしか頭から湯気が出ている気がする。

「か、かわいいとは、破廉恥な！」

そう考えると急に彼の顔が浮かぶ。

今までは考えてこなかったが、顔は美形だし、強いし、名声も…

そこまで考えて頭を強く振る。

「ぐ、紅蓮閣下の御前で恥をかかせおって！

次あつたら叩き切つてやる！！」

「ははははっ！そんなことを言うな。

彼にきちんと礼と詫びを入れておけよ。」

そう言つて紅蓮中将は行つてしまわれた。

今回の件、決闘は私達の早とちりに過ぎなかつた事を教えられてしまった。

早く一貴殿に合つて謝らなければ…

物思いに耽つてしているとドアをノックする音が聞こえた。

侍従がドアを開けに行く。

私はテレビのスイッチを切った。

なにやら騒がしい。もめているようだ。

「どうしたのだ？客か？」

「は、はい…ですが…」

困惑しているようだ。客は客だ。

「構わん、通せ。」

「はい…私は外で待たせていただきます…」

「ん…」

するとカーテンレールが開けられる。
そこには一貴殿がいた。

「き、貴様は！」

ついつい指を指してしまった。

右手には籠に入った林檎、バナナ、左手にはゆずレモン茶と書かれた瓶を持っていた。

「貴様は無いだろう、貴様は。」

「ふん！貴様など貴様で十分だ！」

胡座をかいてそっぽを向いてしまった。
冷静に考えればかなりの非礼な態度だ。
紅蓮閣下の仰った謝罪が出来ないではないか！

「まあ……いい。見舞い品だ。受け取っておけ。」

備え付けの机の上に見舞い品が置かれる。
そして椅子を引きずり出し一貴殿は座る。

水をうつたような静けさが空気を支配する。

私はただ一貴殿に謝りたいだけなのだ。
だがしかし、当の本人を目の前にしてしまうとそれが出来ない。
そもそも彼は何しに来たのだろうか？

一人で勝手に現状理解に努めていると、突然相手が頭を下げてきた。

「月詠…

すまなかった!!」

「お、おい！何で貴様が謝る！

元はと言えば私達が仕掛けたことなのだぞ！」

そう、私達の勘違い。

私達が謝るべき所。

「いや、女の子に手を上げてしまった事実だ。

それに怪我までさせてしまった。

すまない。本当にすまない。」

それを自分の責任として受け止めようとしてくれている。

私が”女の子”だから…。

男だったらこうはならないのだろうか？

いつもだったら、男、女と差別するな！、と言っている。

だが、今回は不思議と”女”として認識されている事に喜びさえ感じている。

「いや…いいんだ。

頭を上げてくれないか。」

頭を上げて欲しい。

頭を下げさせている私が悔しい。

「良いのか…？」

私達は腹を切って詫びなければならぬほどの事をしでかしている

筈だ。

それを流そうとしている。

この”男”は…

「いい…」

そうして彼は顔を上げる。

不覚にも目が合ってしまった、私の胸は高鳴ってしまった。

「くっ！き、貴様は手加減をしたようだな！

いつか貴様を追い越してやるからな！覚悟しておけよ！！馬鹿！」

馬鹿なのは私だ！！

なんでこんな事を言ってしまうのだろうか。

まともに話が出来ない。

「ば、馬鹿って…」

彼は苦笑いをして頭を掻く。

若干俯き加減になって一貴殿は考え込む。

馬鹿、馬鹿と罵倒ばかりしていれば嫌になるだろう…。
嫌われてしまっただろうか？

そして私は少しのぞき込むようにして彼を見る。

すると急に顔を上げ、にこやかな顔でこっちを見る。

「いや、分かった。いつでも勝負を受けてやる。

だが、今度は決闘（死合い）はよしてくれよ。
手合わせで頼む。」

突然の笑顔に動揺してしまい変な事を口走ってしまう。

「て、手を合わるだど!!」

何を破廉恥なことを言っている!

早く帰れ!」

自分の言っている事が恥ずかしくなってしまう、机に置かれたせつかくの見舞い品を掴んで彼に投げてしまう。

「おいおい!! よしてくれよ月詠。
わかった。帰るから。」

と、いそいそと出て行ってしまう。

何でも簡単に関引込んでしまっんだ。

私が馬鹿みたいじゃないか。

「待て、天木!」

つい、止めたくなってしまった。

「どうした?」

彼は振り返る。

だが私は窓の方に顔を向けてしまう。

「その… だな。」

わざと顔を殴らなかったそうだな。

何でだ?」

聞く必要の無い事をつい聞いてしまった。

「そ、それは…」

急に一貴はどもって頭を掻いている。

「か、かわいい女の子の顔を傷つけるのはどうかなって…」

く、くそっ！

なんて卑怯な奴だ！

「フンッ！破廉恥なお前らしい理由だな！」

そもそも何が卑怯なのだろうか？

「す、すまん、月詠。」

そこでまた外に出ようとする。

「ま、待て。話は終わってない。」

呼び止めておきたい。

もつと話を聞いて欲しい、もつと見ていて欲しい。

そんな気持ち芽生え始めてしまった。

「私のことは、そ、その…、マ、マナと呼んでいいぞ！

いや！決して許した訳じゃないからな！

宿敵として認めてやったただけだ！」

許してもらうのはこちらの筈なのに…。

「そうか…じゃあ俺のことも名前で良いよ。」

それなのにその事は咎めない。
もう、どうすればいいのだ！

「うるさい！！早く帰れ！馬鹿！」

また、馬鹿と言ってしまった。

彼はそのまま帰ってしまう。

うう…、そうになると心苦しい。

自分が恨めしい。

そんな事を考えてると彼のあの笑顔が浮かんでくる。

「一貴か…」

何故か彼の名前を呟いてしまって、急に恥ずかしくなりベッドに籠もってしまった。

第7話：友愛＋（後書き）

紅蓮「アタックチャンス。」

すいませんでした。反省しています。

児玉 清さんが亡くなった時は非常にショックでした。

さてさて、ついにマナさん…きましたね…。

彼らはまだ7歳ですからね。

青春ですな〜。

ちなみに誉士夫さんは、この後友愛され…

おや、誰か来たようだ。

10/18

いかがでしょうか？

好きな子をいじめてしまう…そんな心理を描写してみました。

そして、男と女を意識する年頃？

あれ？普通中学生くらいですよね？

…この世界の人々は精神年齢が高いのでしょうか！

照れ要素は難しいです…。

それでは。

第8話：Kyrie eleison（前書き）

陰謀論の極みです。

第8話：Kyrie eleison

メキシコにある、とある教会に電報が届く。
それを十字架を首にかけた一人の青年が受け取った。
彼の表情は明るく、非常に晴れやかだった。

「助祭様、良いことがあったので？」

郵便局員は十字を切った後聞く。

「ええ、それはもう。」

これはGood news（福音）ですよ。

こんな日に来る電報はさぞ、幸福な内容でしょうね。
貴方にも神のご加護を。」

そう言つて礼拝堂の扉を閉じる。

そこには修道着を着た一人の女性が居た。
彼女を確認すると、歩きながら電報を開く。

「ああ、神よ、何故我を見捨てたもう……」

先程までの嬉々とした表情とは打って変わって、悲壮めいた顔になり、倒れ込むように膝をついた。
それに驚いた女性は駆け込んでくる。

「どうしたの!？」

泣いている、彼は、泣いている。
父が死んだ時は泣かなかったのに。

「友が…我らの友が…亡くなりました…。」

「どうゆうことよ…」

答えなさい!!トリファ!」

泣き崩れてまともに話が出来ないこの男、ヴァレリア・トリファの胸ぐらを掴み揺する。

「私は何も聞いていないのよ!

貴方から”あれの”解読が出来たからって来てみれば、何よ!この様は!

我々は何千年もこの時を待っていたのよ!!」

それでも反応しない。

目からは滝のように流れる涙。

しかたない、と呟き彼を担いで個室へ移動する。

身長190cmもある巨体を担ぐこの女性の名は、リザ・ブレンナ
I。

身長174cm、B:93 W:60 H:91という、シスター
ならざるグラマラスなボディを持っている。
ちなみにFカップだ。

彼女の存在が人類にとって福音と言っても過言ではない。

が、今回の問題はそこではないだ。

個室に着きトリファを椅子に座らせ、水を差し出す。
未だ虚ろ目だったが、頷いてそれを受け取る。
飲み終えた彼は一息つくと、話し始めた。

「確かに解読できました…しかし…」

「はあ…解読できたのは分かっているのよ。
それでそれと今回の電文はどう関係あるのよ？」

真っ赤に腫れた目をハンカチで拭きながらトリファは答える。

「我らの教義、”汝ら耐えよ”は覚えてますね？」

「それはそうよ。」

それが我々の行動理念であり、根本理念だもの。

『聞こえし者伝えよ。』

汝ら迷える子羊達、新たなる扉開く時、悪魔に合いにけり。
されど、それ悪魔にあらず。神の子なり。

汝ら耐えよ。審判の日は近い。』でしょ？

そして”赤、白、黒”。

これがあの”失われたモーセの言葉”。

つまりは”カバラ”を用いた我々の世界解釈の仕方。

または”世界樹”の活用、って言っても良いわね。

まあ、そのまま理解してしまった、残念なキリスト教徒がいるわけだけど。」

そんなこと常識でしょ？、と、蔑んだかのような目つきで机にもたれかかりながら答える。

解釈の仕方は様々である。

失われたモーセの言葉はルーン文字で書かれており、それ故に伍長は、ゲルマン人こそが優越民族だと叫び始めた。

そこまで聞き少しうなるような声を出しながら彼は話を続ける。

「そう…。先代の方々は新たな扉を無理に開こうとし、ナチス・ドイツに手を貸した。

そして、あのカルトマニアは我々の意見を無視し、暴走し始めた。故に我々がアメリカ力を使って止めたわけですが…」

彼らはナチス・ドイツを利用し新たな扉を開こうとした。

そして”ウイスパード”（聞こえし者）は、ナチスの資金を用いて、聞こえてくる声を頼りに様々な兵器を作り出した。

ヘーネル St G 44

ジェット戦闘機「Me 262」

V1飛行爆弾

V2ロケット

ヴァッサーファル

ステルス技術等々…

挙げればきりが無い。

そしてそれこそが、現代兵器の源となっている。

だが、余りにも力を付けてしまったナチスは1000年帝国なる世界創造をしようと夢想し始める。

これは彼らが望む世界ではなかった。
世界全てが平等に力をつけてもらわなければならない、と言っのが彼らの考えだった。

ナチスの1000年帝国は力による征服、若しくは屈服…。

これでは世界がまとまる筈がない。
ローマを繰り返す事となる。

よって、自由の国であるアメリカ合衆国に彼らは目をつけ、新技術の提供をし始める。

それが原子爆弾であり、ロケット技術だ。

この技術を用いてアメリカは第二次世界大戦に勝ち、世界に”影響力”のある国となる。

そして、冷戦。

地球上に扉がないことは国際連合を通して分かった。
ならば宇宙にあるはず。

そういう考えがあり、米ソは宇宙開発に力を注ぐ。

結果、火星に”扉”が発見された。

それと同時に”神の子”（BETA）を発見し今に至る。

BETAの認識は彼らの組織内で大きく分かれた。

BETAは神の子であり、神は我々人類を試しておられる、ここまでは共通認識、この後が3つに分けられる。

1、それによって人類が減ぶとしても、それは神の意志であり、無為に逆らう事は教えに反する。（キリスト教恭順主義派）

2、それに抗う事こそが、神の意志であり、戦い続け約束の地を得

ることこそが真理である。（シオニズム）

3、それに抗い、我らのメシアが到来するまで耐え続け、最後まで抵抗する。（メシア主義）

もとはと言えば、3つめの主張が源流だったが、今やそれを信仰する者はあまり多いとは言えない。

そしてその信仰の大本が彼ら”聖槍十三騎士団（L D O）”である。

「まあ、結果として”扉”の位置はわかった訳だし、よかったんじゃない？」

我々”ウィスパード”の役割は果たされたのだから。」

ブレンナーの言葉を聞いた瞬間、トリファはハンカチを床に叩きつけて叫んだ。

「違うのですよ！！」

我々の役目は終わっていないかった！！」

彼の眼光は異常に鋭くなり彼女を睨みつける。

「あれには続きがあつた！！」

それこそが今回の解読の結果！！

『彼の者を待ちたまえ、聞こえし者よ。』

彼の者、漆黒のたてがみ、赤き瞳、純白の肌を持つ者なり。

その者、樹に愛されし者なり。

愚かなる者、神の御技使いし時、彼の者目覚める。
然れども、未だ彼の者迷える子羊なり。
されど、彼の者に従え、聞こえし者よ。
彼の者救われし時、大いなる力放たれなん。
新たなる扉開きし時、汝ら皆繋がりて世を超越す。
聞こえし者よ、彼の者愛せよ。
彼の者友なり。」

我らは…我らの唯一の友を…今日失ってしまった…。
解読するのが遅すぎた…。もう、終わりです…。」

そこまで言うと、床に崩れ落ちるトリファ。
開いた口がふさがらないブレンナーは、え、え？と何度も繰り返している。

「ま、まさか、その友って…」

「重三郎様です…。
最後の手がかりが今日亡くなってしまった…。」

「う、そ、でしょ…」

「いえ…本当です。」

ブレンナーは放心状態。

対して、トリファは平穩を取り戻しつつあった。
彼女の肩に手をやさしく乗せる。

「リザ…ショックなのは分かります。
しかし、聞こえし者よ、彼の者愛せよ。彼の者友なり。」

この教えに沿って重三郎様にお別れを言いに行かなければ…。

これも、神のお導きかも知れません。

終わりだと分かっている、抗い続け、耐えるのが我々だったはず。

さあ、行きましょう、リザ。」

ブレンナーは泣き崩れてしまった。

それを彼は胸を貸す事で癒す事にした。

第8話：Kyrie eleison（後書き）

父ヴァレリアン・トリファは亡くなり、跡継ぎはヴァレリア・トリファとなりました。

ンが有るか無いかの違いです。

Dies iraeのキャラは一部しか出ません。

聖槍十三騎士団の欠番も有ります。

テンブル騎士団の旗は赤、白、黒。

ナチス・ドイツの旗も赤、白、黒。

聖槍十三騎士団の旗も赤、白、黒。

類似性が有ったのでつけ込ませて頂きました。

駒が揃いつつあります。

暴れられるのはもう少し先…。

第9話：邂逅の時（前書き）

10/18に 第7話：友愛 を更新しました。

今回は長めになってしまいました…

第9話：邂逅の時

「祇園精舎の鐘の声、か…」

葬儀中誰かがポツリと呟いた。

それは一貴に対して言った言葉なのか、それとも自分自身に言った言葉なのか…。

榊は彼を思っただけ、無言で刀を抜こうとし、一貴はそれを手で制す。

「おじさん、ありがとう。」

父はそんな事を望んで無いと思う。」

それを見ていた内海も懷から手を引いた。

榊は何か言おうとしていたが、先に一貴が話し始める。

「このご時世、ああゆう事を言うのはもったもたと思います。」

あのかつての強国、ソ連がアラスカに逃げるほどの人類の敗走劇。それを目の当たりにして弱気にならない方が不思議です。」

1982年初頭、ソ連は米国に頭を下げてアラスカを租借させてもらい、移住が次々と進んでいるらしい。

ソ連と言えば米国と冷戦を繰り広げた大国。

ニユースでそれを聞いたときは日本中が驚愕させられた。

あのソ連が撤退している、と。

そして、ヨーロッパもBETAにほぼ制圧されかかっている。

「50年という期限付きで租借していますが、果たして人類がそこまで…」

「坊主！その先は言っちゃいけねえ。」

このBETAとの戦い、既に詰みなのだ。
皆それを知っている。

いくら、いくら戦ったところで押されていく。

戦争の基本は物量、人海戦術。

まあ、大量破壊兵器があれば話は別だが、今は無い。

あつたところで意味は無い。

大量に打ち込んだところで光線級に落とされるだけであり、仮に当たってもほぼ無限にわいて出てくる。

そしてBETAの生態系も殆ど分かっていないのだ。

「そうですよ、”会長”がそんなだと現場の我々が萎えてしまいますよ。」

内海はいつもの笑みを崩さず苦言する。

朝、目が覚めると一貴はいつものように服を着替え、顔を洗い、うがいをし、歯を磨く。

いつものように自室を出て、いつものようにテーブルにつき、いつものように食事を待つ。

ただ一つ、重三郎が席にいない事を除いて。

女中達はいつもならいる重三郎が居ない事に驚いていたものの、呼びに行つて良いものか考えあぐねていた。

「誰かおじさまを呼んできてください。」

畏まりました、と返事をし頭を下げて外に出る。

じじいがないだけでも、この大きなテーブルはもっと大きく感じるものだ。

数分後、扉が強く開けられる。

「何事か！」

上女中は声を上げる。

「重三郎様が！重三郎様が！！」

異常に動揺して叫んでいた。
息を整えつつ、また叫ぶ。

「止まっています！心臓が止まっています！！」

重三郎はベッドの上で静かに息を拭き取っていた。
医師の診断結果では老衰。

享年83歳。

遺言は簡潔に一言。

「全てを息子である一貴に。」

法的には全く意味の成さない書き方。

それでもその通りとなり、天木商会、天木重工業は重三郎の意志を尊重し、天木一貴を正式な跡取りとして認めた。

まだ8歳という若さで天木家当主となり、そして天木グループの牽引者となった訳だ。

この現状に人事は大きく動いた。

天木商会には内海を、天木重工業には榊を筆頭として動く事となった。

榊は帝国陸軍技術大佐、兼、技術廠・第壱開発局部長。

彼は82式（F-4改）撃震の名付け親であり、かつ、開発主任である。

その伝説的とも言える彼が、帝国陸軍を辞め天木重工業に戻ってきた。

内海は天木重工業、戦術機課課長。

新OS、つまりは「ASURA改」開発、そして「Zephyr Phantom System」の開発主任をしていた。

実は彼、天木グループに来る前はかなり非合法的な商売活動をしていたらしく、公安当局に逮捕される寸前に重三郎に助けられた過去がある。

曰く、アウトローな商売では世界一位だったそうだ。

しかし、重三郎の実力主義のお陰で会社では好き勝手な事が出来、それ以来そゆう関係からは一切手を引いている。

実際、業績を上げ続けているのは彼の合理性が一端にあるのだ。

幸い、天木家は他の殆どの武家との縁を既に切っており、関わりがあるとすれば、煌武院家とその身边、そのくらいである。

故に今回の相続関係に一切口を挟んでこなかった。

突然、背後にいた黒崎が耳打ちをしてくる。

「会長、ドイツ系の方々がいらっしやるようです。」

ドイツ系…ああ、ナチの関係者ね、と脳内で納得しつつ、頷いて返事をする。

そろそろと…。

ざっと100人、いや1000人!?

一人一人、一貴を見るたびに握手を求めたりハグをしてきた。

一言二言思い出話や、礼を言いながら皆涙を流し、感極まっているせいか皆ドイツ語だ。

そこで一貴は思い出す。

自分は今まで泣いていなかった事に。

その一団の最後に長身の男性と、美しい女性が喪服姿で現れ、一貴を見ると頭を下げた。

「初めまして、一貴さん。

この度は…心からお悔やみ申し上げます。」

流暢な日本語が出てきた事に少しばかり気をとられたが、一貴も頭を下げる。

「…お心遣いありがとうございます。」

顔を上げ長身の男性は話し始める。

「突然の重三郎様の死、私たちは非常に困惑いたしました。しかしながら、老衰という天寿を全うされた亡くなり方…。我々も…」

と、話している途中、隣の女性が彼を肘でつついた後、咳払いをした。

恐らく、名前を紹介していない事に対する一貴の心情を察してくれたのだろう。

彼は一貴の顔を見て、申し訳なさそうな顔をした。

「申し遅れました…。」

私、ヴァレリア・トリファと申します。

父のヴァレリアン・トリファがお世話になりました。

彼女はリザ・ブレンナー…。

教会のシスターです。」

「貴方がヴァレリア・トリファさんですか！

お初にお目にかかる。

私も貴方のお父上には大変お世話になりました。」

いえ…重三郎様がしてくださった事に比べれば…、と謙遜する。

「しかし、重三郎様の死は人類にとって大きな損失となりました。」

「…父は本当に偉大な方だったと私も思います。」

「なんと！！一貴様、今”父”と！？」

亡くなった時からだろうか、いつの間にか、じじいではなく”父”
と呼んでいる一貴がいた。

今の今まで誰も気づいていなかった。
むろん本人もだ。

「おお…重三郎様もきつと喜んでらっしゃる…」

「喜ぶ？なぜ？」

一貴は本当に分かっている様子だった。
トリファは慈悲の眼差しで話し始める。

「重三郎様は一貴様の事を本当に大切に思っていた。
私の父に会ったび、こう漏らしておられた。

『いつも、一貴は父と呼んでくれないのじゃ。じじいじじいと呼
ばれている。

でも、一貴は私の息子。あの子は大切な子。

例え血が繋がっていなくとも、私の息子なのじゃ。

今度は何が起ころうとも守り抜く、今まではそれが出来なんだ。
しかし、今回は、今回こそはそれを成し遂げる。

それが儂の最後の生き様よ。』

決意表明を私の父に毎回する…。素晴らしい”お父上”に巡り会
えましたね、一貴様。」

「そう、ですか…」

そんな事だったらもつと早くに呼ぶべきだった…。
私の恩人にして私の養父。

感謝しても感謝しきれない存在に今まで何が出来ただろうか。

心なしか一貴の目は潤んでいる。
涙を堪えているのだ。

「しかし、重三郎様は感謝を望んでいなかった。
『それが、親子というものよのう。』、と。」

まるで一貴の心情を読むかのような言葉。
ついに、彼の涙腺は決壊した。
ぽたりぽたりと、大粒の涙が流れ落ちていく。

「「「「「」」」」」

誰も声をかけられなかった。
だが背をさする事だけは出来る。

「私は…父のしてくださった事に感謝している…
でも、今となつては、その言葉は届かないっ…
なれば黄泉の国まで轟くような武勲を立て、その恩に私は報いる
！！」

眼鏡を外し涙を必死にぬぐいながら宣言する。
それはつまりBETAに勝つという事だ。

内海も榊もトリファそれに同意するように強く背中をさすり泣いた。

だが、ただ一人、リザ・ブレンナーは破顔していた。

日本人離れたその容貌には当初腰を抜かしそうになった。

黒い髪、白い肌、そして美しい顔。

これはさぞ女性にもてるだろうと思い、心の中でほくそ笑んでいた。

しかし眼鏡を取った彼の目はどうだろう？

赤だ。

一瞬、身体がふらついた。

目を見た瞬間、脳裏に言葉が走る。

『彼の者、漆黒のたてがみ、赤き瞳、純白の肌を持つ者なり。
その者、樹に愛されし者なり。』

樹に愛されし……つまりは生命の木に愛されている者。

”天”の”木”、そして”一”人の”貴”い人。

天木一貴。

「ああ…」

全身が震え出す。

このお方だ、このお方こそが我らの救世主。
彼の者友なり。

本当に友だ。我々唯一の友だ。最後の友だ。

「Ich erinnere euch, Br?der, an
das Evangelium, das ich euch
verk?ndet habe. Ihr habt es an
genommen; es ist der Grund, au
f dem ihr steht.
Durch dieses Evangelium werde
t ihr gerettet…」

彼女はそのまま膝をつき祈りの姿勢をとり祈りを捧げ始める。

「第一コリント15章？」

トリファは突然の出来事に目を点にしている。
だが、彼も頭の切れる男、それに至った。

「!？」

まさか！」

一貴の顔を凝視する。

一貴も自らの失態に気づいたのか目を隠す。

まずい……舌打ちをしたのは内海だった。

そして、いつの間にか抜いてあつた銃をトリファの眉間に構えている。

同様に榊もブレンナーの首筋に刀を突きつけている。

今ここで、こいつらを殺しておけば会長とのナチの関わり合い日本国内では糾弾される事はなくなる。

赤い目という事が外部に漏れてみる、天木グループは一発でつぶれる。

ならばっ！

2人は手に力を込めようとした。

「ふふ、ふふふは、はははははははははは——ッ」

トリファは突然、壊れたように笑い出す。

天を仰いで、身をよじって、声高らかに大笑している。

「くくくつ、なるほど、なるほどそうですね。」

ははは、これはこれは、なんと素晴らしい。

素晴らしいですよ、我が友よ。」

何を笑っている！？

気でも狂ったのか。

内海はこれ幸いと引き金を引こうとする。

狂った奴が会長を殺そうとした、素晴らしいデコイだ。

「否、狂ってなどいませんよ。」

私は正常だ――」

心を見透かされたようで内海は一瞬たじろぐ。

その隙を突き、トリファはその巨体翻し柵の刀を蹴り飛ばし、ブレンナーを抱きかかえた。

「Auf Wiedersehen .

我が主にして、我が首領閣下。

次回伺いする時は、正装にて参上させていただきます故に、今回の無礼はお許してください。」

頭を垂れ、最後まで言葉を発すると、足下に手榴弾らしき物5、6個を落とす。

「「危ない!!」」

柵と内海は一貴に覆い被さるようになり倒す。

警備員は今更になって銃をトリファ達に向ける。

しかし、時は既に遅し。

爆音と閃光、ついでに煙幕をまき散らし、彼らはその場を去っていた。

第9話：邂逅の時（後書き）

聖槍十三騎士団…

色々と規格外な面々になるでしょう。

しかし、Dies iraeのようなレベルにはなりません。そんな事したらBETAどころの話ではなくなります。

なので、このお話ではカルト的宗教の集団、そして最高の頭脳集団、または最強の武力集団、という位置づけで踊ってもらいます。

フルメタのアマルガムのような、ミスリルのような組織…でしょうが。

いずれにせよ規格外な事には変わりありません。

しかしまあ、榊さんといい内海課長といい、とんでもない頭脳を天木家に置いていました。

というか、Dies iraeとか、こういう有能？キャラがいないとマブラブの世界ってつくづく詰みなんだなって思います。

…ただ、天地無用！のキャラを入れたら一発で終わりますよね。彼らは今回の作品にはほぼ出させません。

それでは。

第10話：狂気の産声（前書き）

幼少期これで終わります。
連日投稿で長いです…

第10話：狂気の産声

8：10 学校の門が開く時間。

5分もしない内に生徒が次々と登校してくる。

ある者は徒歩で、ある者は自転車で、そしてまたある者は自動車で。

ただ、今日の学園の様子は少しおかしい。

警備員がいるのはいつもと変わらないが、制服、黒のスーツ姿の警察官が外堀に沢山いる。

耳に手を当てたかと思えば、皆急に辺りを見渡し、警戒し始める。

すると、白バイ3台、パトカー1台に先導されて赤色灯を上げた黒塗りのセダンが2台、後方にはパトカー1台が、1台のセダンを守るようにして門の前に止まった。

車からは完全武装した警官が数人出てきたかと思えば、サングラスをかけたスーツ姿の厳つい男達がわらわらと出てきた。

彼らは、周辺の安全確保をしたあと、一人の子供を守られるようにして門をくぐる。

天木一貴は先日「の葬儀場」襲撃事件により、以前から天木家はVIPとして国に認定させていた事もあって、警察の警護対象となった。

誰の襲撃なのかは未だ明らかになっておらず、マスコミは極右テロリストの犯行と報道している。

しかし、武家には、天木一貴がナチスのシンパに狙われたという噂が流れており、天木家が脅迫を受けているという話で持ちきりだ。

真偽の程はわからない。

なぜなら天木グループは未だに正式な記者会見を行っていない。
一貴のクラスではその話で盛り上がっていた。

その中で赤い斯衛の服を着た2人組は内心穏やかでない。

怪我はないのか？重三郎様の死は精神的に辛くないか？
そんな言葉ばかりが頭に浮かんでくる。

月詠マヤ、マナは決闘をした後、一貴とはこの1年間、比較的良好な関係を築いている。

葬儀に行こうとしたが襲撃の報が届き中止となり、かれこれ1週間以上顔を合わせていない。

良好、と言っても彼女達の一方的な歪んだ愛情表現だが…

「ほら、弁当だ。何故か2つもある。
一つ毒味してくれ。」

昼食の時間になるとマナが一貴の前にぶっきらぼうに弁当を差し出す。

「あら、マナ？」自分で”作った弁当を何で一貴に毒味してもらうのかしら？」

自分という所を強調してマヤは言い放つ。

「うぐっ…」

道理だ。凶星を付かれて言い返せない。

「毒味なら侍従にまかせなさい。

それはそうと、一貴殿。私のお弁当を食べてみてくださいませんか？

私、”花嫁”修業の一環で殿方の意見を頂きたいのです。」

天使のような微笑みに、白い肌を僅かに赤く染めて一貴に尋ねる。
そしてまた、花嫁という部分を強調する。

この聞き方は反則だ。

これを断れる男がいたら、そいつは男じゃない。

あ、うん…と、了承しかけた所で、マナが机を手で叩いて割って入る。

「うるさいぞ！マヤ！毒味ではない、”独味”だ！

独りの人として味を見てもらいたいのだ！！」

うあゝ、無茶言ってるよこの人…と、周りの空気が伝えてくる。

「あら、独りの人とはどうゆう事かしら？」

揚げ足を取り、2人の間には火花が散り始める。
それからあーだこーだと口論が始まる。

「あゝそろそろ昼食の時間が終わってしまいますよ？」

近くに座っていた女の子がそつと声をかけた。

「「それもそうだな、一貴はどちらを食べる？」」

こうゆう時だけ息が合う二人。

「「つていない!？」」

こうして不毛な言い争いをしている間に一貴は屋上へ避難していた。
こんな事は日常茶飯事、クラスの名物だ。

クラスではそれを生暖かい目で見ている人が、羨むようにしている
かの2者に分かれる。

といっても彼らはまだ初等科2年。

この学園の教育水準の高さ、否、家庭教育の高さがにじみ出ている。

教室の扉が大きく開けられ、教師が教壇に立つ。
その頃には皆席につき静かにしていた。

「皆さん、おはようございます。」

突然ではありますが、天木一貴君…さんは今日をもって初等科を
卒業します。」

ざわつく教室。

普段ならこんな事はない。

教師は咳払いをしいったん場を沈める。

「皆さんが動揺するのは、無理ありません。

実は私もたった今聞かされ驚きましたが仕方のない事です。
最後の挨拶という事で、本人が来ています。

天木：さんどうぞ。」

扉の方に声をかけ、教壇を空ける。

すると2人のサングラス、黒のスーツ姿の男が入り全ての窓、カーテンを締め、教壇を挟むようにして手を後ろに組み立った。
そして、スーツを着た一貴が入ってくる。

「皆さんおはようございます。

このような形でお別れをするのはとても心苦しいです。

先週私の父が亡くなり、私が天木グループの会長となりました。
学業は高等学校卒業程度認定試験を合格していますので、何も問題はありません。

：そんな事はどうでもいいですね。」

自嘲気味に笑ってみせる。

端から見るとすごく痛々しい。

「先日、葬儀途中、襲撃を受け、これを理由に政府から警護対象者として認定されました。

私がこの学園にいる事で皆様にいらぬ危険にさらすのは私の本意ではありません。

ですから：私は一足先に卒業します。」

敬語で話す一貴を見て、皆は何となく納得した。
もういつもの一貴には会えないのだと。

「みんなには…いえ、皆様に会えて本当に良かったです。
本当なら…仮定の話をしても意味がないですよね。
本音で話して、楽しんで…
本当によかった!」

敬語と友達口調がごっちゃになっている。

「ありがとう!!」

逃げるようにして外へ出て行く一貴。

「待つて!」

男の子が声を上げる。

「俺たち…また会える…よな?」

黒服がドアを開けて退出を待っている。
しかし、立ち止まって彼と月詠達、そしてみんなを見渡して一言だけいう。

「きつと」

そうして一貴は出て行き、クラスには静寂が訪れた。

門を出ると内海がいた。

「か・い・ちょ!」

へらへらといつものように笑っている内海が手をふっている。

「仕事はどうしたのですか？」

若干苛つきながら問う。

聞いても無駄だがどうせ黒崎に投げているに決まっている。

「いやだな～ぼかぁね、会長が心配で飛び出して来たんですから。労いの言葉があっても良いじゃないですか。」

嘘に決まっている。

無視して車に乗り込もうとした。

護衛を待たせても悪い。

「ま、まってくださいよ。」冗談ですから。」

一緒に乗り込んでくる内海。

良いのですか？と護衛が聞いてくるが、是、と答えるしかない。理由もなくこうやって行動するのはありえない。

車はゆつくりと会社に向かって発進する。

「最後の別れはどうでしたか？」

というか、会長さんなんだからもつと堂々としてくださいよ。」

「：そんな与太話をするために貴様はここに来たのか？」

そのために給料を払っているのではないぞ、私は。」

普段とは違うきつい言い方をする。
はつきり言って八つ当たりに近い。

一貴も自覚している。

「ひえゝ、怖いなあゝ会長！」

わざとらしいリアクションをとる内海。

ため息をついて、片手でこめかみを押さえる一貴。

「わかった、すまなかった。

本当になんの用なんだ？」

堂々としろとは榊にも言われていた事だ。
改めて反省して疲れ気味に再度聞く。

「それはね。」

にんまりと笑みをこぼしたかと思ったら、カチリッと脇腹辺りに音がした。

「こつゆつ事」

一貴はとたんに目を細めて、ドスのきいた声を出す。

「どうゆう事だ？ 貴様。

私に銃やなんやの脅しはきかんぞ。

樹雷流武術をなめているのか？」

内海は若干冷や汗をかいている。

「ははははっ…」

乾いた笑いをする内海。

「冗談でやっているのか？」

笑えんぞ。」

再度睨みつける。

「会長さん、ほかあね、会長さんが好きだし、前会長は尊敬もしてるし感謝もしている。」

でもね、それ以上に手段の為には目的を選ばない人間なんだ。」

「何が言いたい？」

「僕は前、リチャード・王って名前で、まあ、ある組織の幹部をやってたんだ。」

今は違うけど。」

んで、当時『黒の騎士』とも名乗っていた。」

「それがどうしたっ！」

痺れを切らすように低い声で小さく怒鳴る。

運転手とはガラスの壁が引かれており声が聞こえず、こちらの様子も見えていない。

直ぐにでも彼を殺す事は容易いがこの行為の理由が分からない。

「焦らないでよ、会長。」

黒の騎士って上層部に対する嫌味で名乗ってたんだけど、それがばれて公安にパクられそうになってた所で重三郎様に助けられた。

なんで、そのあと僕が逮捕されなかったと思う？」

「…。

父がその上層部の一員だったから？それともそれを上回る権力者だったから？」

「流石会長！ほぼ正解！

その上層部の組織名は…」

と言おうとしたところで会社に着いたようだ。

「会長、続きを聞きたいなら僕の事チクらないでね」
一人で会長室にきてねん」

銃を懷にしまい先に内海は外に出て会社に入っていく。
少し一貴は考えた。

しかし、好奇心には勝てず外に出る。

会社内の警備は万全、という事で警官には納得してもらい外堀の警備を頼んだ。

会長室に入る前に動きやすい赤い斯衛の服を着がえた。

念のため短刀と銃を腰に忍ばせ扉を開ける。

中には内海が一人変わらぬ笑みのまま不自然な位置に立っていた。

室内は変わらない。モスグリーンのカーペットに幅の広い机。

米大統領執務室と言うより別次元の露大統領執務室を模した感じだ。

不思議に思いつつも戸を閉めると、勝手に鍵とカーテンが閉まり電気が付いた。

それ自体が異変なのだが、この部屋の空気がおかしい事に一貴は気づいた。

多くの人がいる、そんな感じた。

「会長、机の前に立ってくださいーい！」

内海を睨みつけつつもその言葉に従う。

立つと扉の前の空間が歪んだ。

いや、それだけではない、一貴の周りの空間が全て歪んだ。

そしてバサリ、と布のこすれる音が響き、ナチス親衛隊の軍服姿の人間が部屋を埋め尽くすような人数で現れた。

「Achtung！」

トリファが声を上げた。

彼だけは何故か神父姿だった。

「「「Sieg Heil! Viktoria!」」」

誰一人目を合わせず右手を上上げる独特の敬礼をしてきた。

ただ言える事はこいつらの目つきは尋常だ。

怯えるような、尊敬のような…そんな目つきだ。

彼らを観察していると、トリファとブレンナーが一步前に出て土下座をした。

「知らずとはいえ先日のご無礼をお許しください、閣下。」

「知らずとは？」

その前に君たちは一体何なのだ？」

姿勢を崩さずトリファは答える。

「我々は聖槍十三騎士団と申します。内海は我々の組織の中層幹部です。」

そういつと、組織について延々と話し始めた。

要約するに、紀元前からウイスパードという天才達が天の声を聞き、様々な兵器を作り出し、救世主と共に樂園に行こう、という宗教集団らしい。

今まで世界のあらゆる国の背後で暗躍しており、今は南極に基地があるそうだ。

「また、戦術機の考案も私達でして、元々は対人を想定した”アイム・スレイブ”という人型兵器なのです。」

「オルタナティブ計画は我々の教義を見直す計画でして、その前身のデイングニファイド13は我々聖槍十三騎士団の事を指します。」

という事はなんだ。

BETAを呼んだのはこいつらなんだな？

「呼んだというのは少し語弊がございます。

彼らは来るべくしてきたのでございます。そして、それを打ち倒すのがあなた様でございます。」

ウイスパードは最強の兵器を創るのだろう？

それならなぜ人類全てにそれを渡さない？

「まだ兵器が未完成なのでございます。」

戦術機が第一次大戦の複葉機とすると、我々の所持しているのは超音速ジェット機なのです。

改良もままならず、乗れるパイロットも数少なく、今のところ3人しかおりません。

これを仮に公表したところで今の人類にはとても扱える物ではございません。

実際それに近い情報を出しましたが結局今の戦術機程度にしかありませんでした。

例外として内海、そして閣下の考案した改造型F-4、そして電磁収縮筋があります。」

そこまで聞いて一貴は苛つきながら口を開ける。

「それで、私が救世主だというんだな？」

「そうです。間違いありません閣下。」

即答した。

「では私の命には何でも従うのだな？」

「その通りでございます。」

またも即答した。

「私は私自身が救世主だと思わないし、君たちが言う大いなる力についても理解できない。」

君たちが私に付き従うという理由はよくわかったが、はつきり言うて信じられないし、信じたくない。」

「まだその時では無いのです、閣下。」

「それも聞いたが、私は生憎、特定の宗教を信仰している訳ではないのでね。」

その気持ちはわからん。

だから私は貴様らの忠誠度を試したい。」

彼らに会って2時間以上話しているが未だに敬礼しており微動だにしない。

彼らのそれは真実だという事を証明する一つの証拠でもある。

だが、彼らの身勝手ともいえるメシア信仰には憤りを禁じ得なかった。

「デイングニファイド13といったな？」

ずいぶんと昔の組織のようだが生き残りはいるのかな？」

「はっ！ここに！」

ペルシャ的な風貌をした50代の男性が前に出てきて膝を下ろし頭を垂れる。

「名は？」

「聖槍十三騎士団 黒円卓第二位 トバルカイン・アルハンブラ」

「よろしい。」

ならば、今回の襲撃騒ぎ、そして私を欺いてきた事の無礼、貴様の死によって全てを不問にする。」

これは八つ当たりだ。

「わかりました。」

なんの迷いもなくダガーを取り出し鞘から抜く。

「お目汚しをお許しください。」

S i e g H e i l ! V i k t o r i a !

首に突き刺し回すように掻ききる。

首はカーペットの上に転がり落ち、血が天井まで吹き上がった。

狂っている。

一貴も、そして、その事になんの感情の起伏を表さない彼らも。体内の血を全て吹き出した身体はそのまま前に倒れ込んだ。

一貴の顔には血しびきが付いていた。それを人差し指ですくい取りなめる。

ああ、越えてはいけない線を越えてしまったと実感しながら。

「貴様らの忠誠はよくわかった。」

眼鏡を投げ捨て、踏みつぶし、おぞましい笑みを浮かべる。

それに答えるようにトリファ達は立ち上がり、白いナチスの制服と制帽を差し出し、彼に敬礼をする。

それを受け取り一瞬で着込む。

黒いネクタイをきつめに閉めた後咳払いをし頷いた。

「よろしい、ならば戦争だ。」

征くぞ 諸君。」

「貴もナチス式の答礼をした。」

第10話：狂気の産声（後書き）

ディグニファイド13、本来は12です。
都合上捏造しました。

オルタ”ネイ”タイプ…？オルタ”ナ”タイプに変更しました。
ちよと違うという雰囲気づくりです。

それはそうと内海専務、凶変しましたね。
これがやりたくて内海さんは登場した言っても過言ではありません。
これからも色々活躍してもらうのですが…

月詠コンビは1年間でれっででした。

本当はその話を作ったのですが没しました。

理由は、初等科の人間がそんな事出来るかつ！という考えです。
なので脳内補完してください…

いずれ機会があれば成長後の話で入れようと思ってます。

突然の出来事で今回発言権を得られませんでした。

ショックで頭真っ白です。

男の子、女の子…名前無くてゴメンね！

トバルカイン…噛ませ犬になってしまいました。

伊達男好きなのですが、ごめんなさい。

一身上の都合で2週間程更新する余裕が無くなりそうなので、書き
ためてた話を出しました。

1話分ですけど…。

次回から新しい章（Show）が始まります。

それでは。

説明無用！閑話：もしも■ ■がそのまま介入したら（前書き）

電波受信！

暇な時間に書いてしまいました。

本編とは関係ありません。辻褄が合いません。

説明無用！閑話：もしも■ ■がそのまま介入したら

「うん？ここは？」

周囲を見渡すと見慣れた艦内だった。

「秋桜、モニターを出せ。ここは何処だ？」

ぶうん。

360度全周囲モニターが目の前いっぱい広がる。

『マスター、地球の軌道上を航行しております。』

ただ、因果律が狂っているようです。』

「因果律？なんだそれは？」

説明によると自分がいた世界と異なる、つまりは異世界に来ているようだ。

あのマッドめ…俺をこんな所に飛ばすとは何を考えているんだ？

「あゝ、とりあえずネットワークを復旧させよう。」

全周囲探索開始。」

『うあ、キモい！』

「何が？」

『キモい生命体がユーラシア大陸を占領しています。』

秋桜はその映像を拡大してモニターに映し出した。
目玉が飛び出た異性体がこちらを見つめている。

「キモ…、BETA？なんだそりゃ？」

地球圏内のネットワークを復旧したところ、BETAと呼ばれる生命体が地球を侵略し、地球人が滅亡されかかっているという情報が出た。

「おいおい…瀬戸様、というより樹雷はこれを公認しているのか？
コンタクトをとってみろ。」

『いえ、先程申し上げたとおり因果律が狂っているため樹雷は存在しておりません。』

この世界では、このキモい奴らが宇宙を占領し、ケイ素系生命体
が実権を握っているようです。』

「ケイ素系生命体？なんであいつらが？」

『訪希深様の実験の一つかと…』

「そうゆう事ね。」

三命の頂神は宇宙を、世界を創造した存在で高次元体呼ばれる。
有り体に言えば”神”だ。

こいつらは様々な世界を管理し、様々な可能性を探究してきた。
以前、訪希深が創造したある次元で”Z”なる強化人間が生まれ、
天地さんを殺そうとした事件があった。

「で、何で俺がこんな所にいるわけ？」

『さあ？私は存じ上げません。』

むふう。

面倒な事になった。

いくら俺だからといって次元を超える事は出来ない。

『マスター、キモい奴らが日本を攻撃しています。』

「日本を？何処？」

『佐渡島です。』

動向をみていると、日本を攻撃しているのではなく、軍が佐渡島を取り返しているようだった。

「とりあえずキモいな。」

『ですね。』

銀河法では、地球のような発展途上の文明と接触したり、自らの持つ技術を開示してはならないとある。

しかし、ここにはそのような法律はない！

『マスター…よからぬ事を考えていますね？』

「いやいや、俺はただ単に日本人の為を思っただな。」

『…でも、一方的な蹂躪は見ていられませんか。』

話している途中、一部の人型兵器がBETAの集団に飲み込まれようとしていた。

「なら…」

彼の足下が光を通さぬ暗闇に染まり、そこに溶け込んでいった――

「柏木ッ！貴様だけでも離脱しろッ！」

>>馬鹿言わないでください！ハッチは守っていますから早くッ！
<<

かといってこれがうまくいくとは限らない。
このままでは私も…そして柏木も…

>>プランDに従って、エコー艦隊がA-02への支援砲撃を開始するわ<<

香月博士の無線が突然入る。

「！」

>>跡形もなくという訳にはいかないけど、何もしないよりはマシでしょう。

レーザー種が出てくる前に済ませたいわ。

早く脱出しなさい！<<

「りよ、了解ッ！」

こうなったらいち早く脱出しなければッ！

伊隅大尉はリフトに素早く乗り外部の脱出を試みる。

>> 気安く近寄るんじゃないよッ！<<

>> 柏木！伊隅を乗せたリフトが上がるまで30秒よ！<<

>> 了解ッ！

うおおおおおーーーーっ！！<<

>> しまった！このままじゃ大尉が！！<<

>> ツ！<<

無線の様子がおかしい。
やられたのか！？

「柏木ーーーーッ！？」

周囲は焼かれ、柏木機は辛うじて生き残っていた。

「ははははは！俺も一様は日本人なんだな！糞虫ども！俺が相手してやる！」

急に現れた謎の男が高笑いをしている。

「何をしているのだ！貴様！死ぬぞッ！」

「俺が死ぬだと日本人！これから起こる事をしかとその瞳に刻んでおく事だな！」

その男の手から目映い光があふれ出した。光は徐々に剣の形を成していく。

そして彼の周りには光の翼が六枚出ていた。

「貴様は……」

「死ね、俗物ども。」

この男が跳躍したと同時に目視できなくなった。とたんにBETAが血しぶきを上げていく。

「ふ、ふははっ はははっ はっ はっ はっ はっ はっ はっ ……！
悲鳴を上げろ！豚のようになー！」

BE T Aの足だけを見事にスライスしていく謎の男。

>>伊隅!どうしたのよ!!返事なさい!!<<<

「男が…男一人でBETAを蹂躪してます…」

>> な、なんですって〜！<<

男は何千というBETAを殺戮した後、突然立ち止まり、宙に浮いた。

宙に浮いているのである。

「数が多すぎて虫が退治できない、そんなとき！

こんなものがあればとっても便利！

特製ビット型ハドロン砲〜」

てつてれ〜♪

何故か効果音が流れた。

「ねえねえ、そんな高性能兵器お高いんでしょう？」

その男は高い声を出し主婦のまねをし始めた。
こんな状況で漫才をしている。

「奥さん〜、今回だけは特別出血大サービス！

なんとこの超小型ビット500個セットでなんと！

な、な、な、なんと！8880円〜！」

ええ〜！！

誰だ驚いている奴！

>> 伊隅、なによこれ？<<

「わ、わかりません博士。」

BETAがめがけて接近しているというのに漫才は続いている。

「やつすゝい!!」

「今から10秒間だけの限定価格です！是非是非お買い求めを」

そう言うときBETAに視線を向けた。

「早速お買い求めのお電話を沢山頂いております。
その数1000万！」

「これはもう、沢山プレゼントしませんと！
さてさて糞BETAども、たらふく食いな。」

彼の背から小さな球根の形をした物体が大量に飛んでいった。
それに向かって異常な数のレーザーが空中に放射された。
しかし…

「ばゝか。そんな低出力のレーザーで落とされるかつ！
ちよび丸1000体持つてくるんだな！」

ラザフォード場のようなものがその物体を守り、レーザーが当たらない。

「夢を見ているのか…私は。」

ため息が出る。

「バイバイ！屑共、チリはチリに帰れ。」

瞬間、空中からレーザーが、ばらまかれBETAを溶かしていった。しかし、BETAはまだハイブから出てくる。

「流石に面倒。秋桜。あそこに打ち込め。」

ハイブを指さし誰かに声をかけ始めた。

「出力は…任せる、地球が吹き飛ばないようにな。」

「了解しました、出力3%、50%圧縮して発射します。
カウント5。」

砲身に熱がこもり始める。

「4、3、2、1、発射。」

小さな球体が地上に落下していく――

——その日地上全てのハイブは地球から消滅しましたとさ。
チャンチャン♪

説明無用！閑話：もしも■ ■がそのまま介入したら（後書き）

本編を書く余裕は無かったのですが、ちょっとした小ネタを書く時間とはとれました。

章が終わることにこんなネタを投下していこうかと思っています。

次回更新は、やはり1週間後になりそうです。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4268w/>

Muv-Luv -3rd story- 世界への介入者

2011年10月29日19時28分発行